

# 船越二ノ上遺跡

福岡県浮羽郡田主丸町大字船越所在遺跡の調査

1999

福岡県教育委員会

# 船越二ノ上遺跡

福岡県浮羽郡田主丸町大字船越所在遺跡の調査

## 序

福岡県教育委員会では、建設省九州地方建設局の委託を受け、一般国道210号浮羽バイパス建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を、昭和55（1980）年度より実施してまいりました。

本書は、平成6年度から9年度にかけて発掘調査を実施した、浮羽郡田主丸町大字船越所在の船越二ノ上遺跡の記録です。この一帯は筑後川と耳納山麓にはさまれた自然豊かな地域として知られておりますが、今回の調査では古墳時代から平安時代にかけての集落遺跡が確認され、先人の足跡を知る貴重な手がかりを得ることができました。

本書が文化財愛護思想の普及および学術研究の一助となれば幸いです。

発掘調査および整理作業、報告書の作成にあたって、ご協力いただいた多くの方々に対し、深甚の謝意を表します。

平成11年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安 常喜

## 例 言

1. この報告書は、平成6（1994）年度から平成9（1997）年度にかけて福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した一般国道210号浮羽バイパスの建設に先立つ埋蔵文化財の発掘調査記録で、一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第11集である。
2. 本書に掲載した船越工ノ上遺跡は、一般国道210号浮羽バイパスの埋蔵文化財発掘調査第11地点にあたり、浮羽郡田主丸町大字船越に所在する。
3. 遺構図は調査担当者の他、石橋丸子・飯田澄枝・山口由美子・榎藤智恵子・中村弘子・大塚ヒロ子・牛島真由美・野口征子の協力を得た。
4. 遺構写真は調査担当者が、遺物写真は北岡伸一が撮影した。なお、空中写真はフォト大塚・空中写真企画・東亜航空技研に委託した。
5. 出土遺物は九州歴史資料館において岩瀬正信の指導で整理・復元作業を行い、実測図は吉田東明・進村真之が作成した。
6. 挿図の浄書は吉田・進村・豊福弥生・原カヨ子が実施した。
7. 出土遺物・写真・図面等については、すべて九州歴史資料館および福岡県文化財保護課太宰府事務所に保管している。
8. 本書の執筆は、IIを齋部麻矢・吉田・進村が分担し、それ以外を吉田が行った。編集は進村の協力を得て吉田が実施した。



## 本文目次

I はじめに	
1. 調査の経過	1
2. 調査の組織	1
II 位置と環境	
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
III 発掘調査の記録	7
IV おわりに	72

## 図版目次

図版-1	1	I区東端部全景(空中写真)
	2	I区全景(空中写真)
図版-2	1	I区1・2号竪穴住居跡(南から)
	2	I区3号竪穴住居跡(東から)
	3	4・5号竪穴住居跡(南から)
図版-3	1	I区4号竪穴住居跡カマド(南から)
	2	I区5号竪穴住居跡カマド(南から)
	3	I区1号土坑(南から)
図版-4	1	I区2号土坑(南から)
	2	I区1号溝東端断面(西から)
	3	I区1号溝(西から)
図版-5	1	I区4・5号溝付近(南から)
	2	I区5・8・9号溝付近(南から)
	3	I区1・22・23号溝付近(西から)
図版-6	1	I区1・26号溝付近(南から)
	2	I区21~23号溝(北から)
	3	I区21~23号溝(南から)
図版-7	1	I区23号溝断面(北から)
	2	I区落ち込みトレンチ(西から)
	3	I区落ち込みトレンチ断面(北から)
図版-8	1	II区上空から筑後川を望む(空中写真)
	2	II区全景(空中写真)

- 図版-9 1 II区1号竪穴住居跡(南から)  
 2 II区2号竪穴住居跡(南から)  
 3 II区28~30号溝付近(北から)
- 図版-10 1 III区全景(空中写真)  
 2 III区中央付近(空中写真)
- 図版-11 1 III区1号竪穴住居跡(南から)  
 2 III区1号竪穴住居跡土層断面(北から)  
 3 III区1号竪穴住居跡カマド(南から)
- 図版-12 1 III区2号竪穴住居跡(西から)  
 2 III区2号竪穴住居跡カマド(西から)
- 図版-13 1 III区3・4号竪穴住居跡(北から)  
 2 III区3号竪穴住居跡(南から)  
 3 III区3号竪穴住居跡カマド(南から)
- 図版-14 1 III区4号竪穴住居跡(東から)  
 2 III区6号竪穴住居跡(南から)  
 3 III区7号竪穴住居跡(南から)
- 図版-15 1 III区9号竪穴住居跡(南から)  
 2 III区10号竪穴住居跡(南から)  
 3 III区10号竪穴住居跡カマド(南から)
- 図版-16 1 III区1号孤立柱建物跡(北から)  
 2 III区2号孤立柱建物跡(北から)  
 3 III区1号土坑(北から)
- 図版-17 1 III区2号土坑(南から)  
 2 III区6号土坑(北から)  
 3 III区10号土坑(南から)
- 図版-18 1 IV区全景(空中写真)  
 2 IV区全景(西から)
- 図版-19 1 IV区井戸(南から)  
 2 IV区井戸断面(南から)  
 3 IV区旧河川(北から)
- 図版-20 I区落ち込み、II区、III区1・2号竪穴住居跡出土土器
- 図版-21 III区2・3号竪穴住居跡出土土器
- 図版-22 III区7・8・9号竪穴住居跡出土土器
- 図版-23 III区10号竪穴住居跡、1・2号土坑出土土器
- 図版-24 III区2・5号土坑出土土器
- 図版-25 III区6・7・10号土坑、1・8・14号溝出土土器
- 図版-26 III区17号溝、流路、ピット、IV区出土土器
- 図版-27 IV区出土陶磁器
- 図版-28 1 出土管状土錘  
 2 出土土製模造鏡・石製品・鉄製品

## 挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図 (1/50,000)	3
第2図	調査区周辺字図および条里の復原 (1/10,000)	5
第3図	調査区位置図 (1/2,000)	6
第4図	船越二ノ上遺跡基本層序模式図 (1/40)	7
第5図	I区1号竪穴住居跡実測図 (1/60)	8
第6図	I区1号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	8
第7図	I区2号竪穴住居跡実測図 (1/60)	9
第8図	I区2号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	10
第9図	I区2・3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	11
第10図	I区3号竪穴住居跡実測図 (1/60)	12
第11図	I区4号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	12
第12図	I区4・5号竪穴住居跡実測図 (1/60)	13
第13図	I区5号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	14
第14図	I区4・5号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	14
第15図	I区土坑実測図 (1/30)	15
第16図	I区溝断面上層実測図 (1/30・1/60)	16
第17図	I区溝・落ち込み等出土土器実測図 (1/3)	18
第18図	I区落ち込み断面土層実測図 (1/60)	19
第19図	II区1号竪穴住居跡実測図 (1/60)	20
第20図	II区2号竪穴住居跡実測図 (1/60)	21
第21図	II区2号竪穴住居跡中央焼土坑実測図 (1/30)	21
第22図	II区溝断面上層実測図 (1/40)	22
第23図	II区出土土器実測図 (1/3)	24
第24図	III区1号竪穴住居跡実測図 (1/60)	25
第25図	III区1号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	26
第26図	III区2号竪穴住居跡実測図 (1/60)	27
第27図	III区2号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3)	28
第28図	III区2号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	29
第29図	III区2号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)	30
第30図	III区3号竪穴住居跡実測図 (1/60)	31
第31図	III区3号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	31
第32図	III区3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	32
第33図	III区4号竪穴住居跡実測図 (1/60)	35
第34図	III区4号竪穴住居跡カマド実測図 (1/3)	33
第35図	III区4・7号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	33
第36図	III区5号竪穴住居跡実測図 (1/60)	34

第37図	Ⅲ区6号竪穴住居跡実測図(1/60)	34
第38図	Ⅲ区7号竪穴住居跡実測図(1/60)	35
第39図	Ⅲ区8号竪穴住居跡実測図(1/60)	35
第40図	Ⅲ区8号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)	36
第41図	Ⅲ区8号竪穴住居跡出上土器実測図(1/3)	37
第42図	Ⅲ区9号竪穴住居跡実測図(1/60)	38
第43図	Ⅲ区9号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)	38
第44図	Ⅲ区9号竪穴住居跡出上土器実測図(1/3)	39
第45図	Ⅲ区10号竪穴住居跡実測図(1/60)	39
第46図	Ⅲ区10号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	40
第47図	Ⅲ区10号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)	41
第48図	Ⅲ区1号孤立柱建物跡実測図(1/60)	42
第49図	Ⅲ区2号孤立柱建物跡実測図(1/60)	43
第50図	Ⅲ区1・2号土坑実測図(1/20)	44
第51図	Ⅲ区4～8号土坑実測図(1/40)	45
第52図	Ⅲ区10号土坑実測図(1/30)	46
第53図	Ⅲ区1号土坑出土土器実測図(1/3)	46
第54図	Ⅲ区2号土坑出土土器実測図①(1/3)	47
第55図	Ⅲ区2号土坑出土土器実測図②(1/3)	48
第56図	Ⅲ区4～7号土坑出土土器実測図(1/3)	49
第57図	Ⅲ区10号土坑出土土器実測図(1/3)	50
第58図	Ⅲ区溝断面上層実測図(1/20)	50
第59図	Ⅲ区1号溝出土土器実測図(1/3)	51
第60図	Ⅲ区6～8号溝出土土器・磁器実測図(1/3)	53
第61図	Ⅲ区9～14号溝出土土器実測図(1/3)	55
第62図	Ⅲ区17～19号溝出土土器実測図(1/3)	57
第63図	Ⅲ区自然流路断面土層実測図(1/60)	58
第64図	Ⅲ区自然流路出土土器実測図①(1/3)	59
第65図	Ⅲ区自然流路出土土器実測図②(1/3)	60
第66図	Ⅲ区ビット出土土器実測図①(1/3)	62
第67図	Ⅲ区ビット出土土器実測図②(1/3)	63
第68図	Ⅳ区遺構配置図(1/300)	64
第69図	Ⅳ区井戸実測図(1/40)	65
第70図	Ⅳ区旧河川出土陶磁器等実測図(1/3)	66
第71図	Ⅳ区出土土器実測図(1/3)	67
第72図	土製品実測図(1/2)	68
第73図	石製品・鉄製品実測図(1/2・1/3)	69
付図1	船越二ノ上遺跡Ⅰ区遺構配置図(1/300)	
付図2	船越二ノ上遺跡Ⅱ区遺構配置図(1/300)	
付図3	船越二ノ上遺跡Ⅲ区遺構配置図(1/300)	

# I はじめに

## 1 調査の経過

一般国道210号浮羽バイパスは、大分県日田市と福岡県久留米市を結ぶ国道210号の交通混雑の緩和と地域産業の発展を図るため、延長14km、幅員16～25mで計画され、昭和48年度に事業化、昭和52年度より用地買収が着手された。現在までに浮羽町と吉井町の一部では暫定対面2車線で供用が開始されており、地域住民に密着した道路として利用されている。

この浮羽バイパス建設に先立って、昭和61(1986)年4月2日付けで福岡工事事務所から「埋蔵文化財の分布調査について」という調査依頼が文化課にあり、文化課は塚堂遺跡を除く16地点の発掘調査必要箇所を回答した。現在までこの回答による16地点についての調査を随時協議しながら実施している。

11地点「船越二ノ上遺跡」の発掘調査については、平成6年当時、周辺で行われていた県営圃場整備事業と歩道を合わせて実施することとなり、福岡国道工事事務所、甘木農林事務所、吉井町第五土地改良区と協議の上、平成6年11月18日より調査を開始した。

調査を開始する上で便宜上全調査対象区域をⅠ～Ⅳの地区に分割し、用地買収の状況に従って、まずⅢ区のうち買収終了部分のみ試掘調査を実施した。その結果、遺構の存在が確認されたため、直ちに本調査へと移行した。Ⅲ区の本調査を進めると同時に、残るⅠ・Ⅳ地区の買収終了区域の試掘調査も並行して行い、Ⅲ区の本調査終了後に、引き続きⅠ区・Ⅳ区の調査も実施した。平成6年度は3月23日に調査を終え、Ⅰ区・Ⅲ区の一部およびⅣ区の調査を完了した。翌7年度は4月28日から調査を開始し、Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅲ区の用地買収終了部分の調査を実施した。7年度は11月14日に調査を終え、Ⅱ区・Ⅲ区の調査を完了したが、残るⅠ区の未買収部分については次年度以降に持ち越しとなった。Ⅰ区の残った部分の調査については、平成9年6月16日から調査を開始し、同年8月22日に船越二ノ上遺跡の全ての調査を終了した。

## 2 調査の組織

発掘調査関係者および報告書作成関係者は次の通りである。

### 建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所

	平成6年度	平成7年度	平成9年度	平成10年度
事務所長	佐竹 芳郎	佐竹 芳郎	藤本 聡	藤本 聡
副所長	中馬 昌昭	中馬 昌昭	兼武征二郎	兼武征二郎
	中空 進	中空 進	別府 五男	別府 五男 新開幸一郎
建設監督官	野鶴 博任	松尾 義信	有家 信義	有家 信義
	平川 澄雄	山川 武春	柴田 智	柴田 智
調査第二課長	西原 広寿	西原 広寿	田中 義高	赤星 文生
調査係長	芹口 臣也	芹口 臣也	斎掛 孝	斎掛 孝
建設技官	桜井 俊郎	島田 隆一	島田 隆一	田中 博明
工務課長	澗 幸一	澗 幸一	河野 良行	河野 良行

工務第一係長	逆瀬川方久	黒木 俊彦	梶原 俊之	梶原 俊之
工務第三係長	田口 仁	田口 仁	斎藤 敬嗣	斎藤 敬嗣
福岡県教育委員会（平成10年度より教育庁総務部文化財保護課）				
総括	平成6年度	平成7年度	平成9年度	平成10年度
教育長	光安 常喜	光安 常喜	光安 常喜	光安 常喜
教育次長	松枝 功	松枝 功	松枝 功	藤吉純一郎
指導第二部長	丸林 茂夫	丸林 茂夫	竹若 幸二	
総務部長				富水 勲
文化課長	松尾 正俊	松尾 正俊	石松 好雄	
文化財保護課長				石松 好雄
参事兼				
文化財保護室長	柳田 康雄	柳田 康雄	柳田 康雄	
参事				柳田 康雄
課長補佐	清水 圭輔	元水 浩士	城戸 秀明	
課長補佐兼				
管理係長				角 伸幸
参事補佐兼				
室長補佐	井上 裕弘	井上 裕弘	井上 裕弘	
参事兼				
課長技術補佐				井上 裕弘
調査班総括	橋口 達也	橋口 達也	橋口 達也	
調査第一係長				橋口 達也
調査第二係長				佐々木隆彦
参事補佐	馬田 稔弘	木下 修	木下 修	中間 研志
	池辺 元明	中間 研志	新原 正典	
		小池 史哲	中間 研志	
庶務				
管理係長	毛屋 信	柴田 恭郎	黒田 一治	
事務主査	安丸 重喜	久保 正志	久保 正志	鶴我 哲夫
主任主事	久保 正志	東 健二	田中 利幸	田中 利幸
調査・報告				
主任技師	斎部 麻矢	斎部 麻矢		斎部 麻矢
				吉田 東明
技師	秦 憲二		吉田 東明	進村 真之
	杉原 敏之		進村 真之	
	吉田 東明			

調査および整理期間中には、近隣市町村教育委員会の方々をはじめ、多くの人々からご助言・ご協力を頂いた。記して感謝の意を表します。

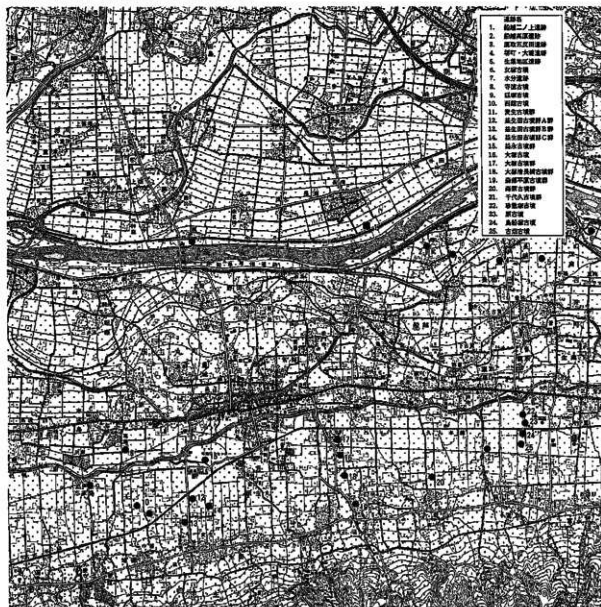
## II 位置と環境

### 1 地理的環境

船越二ノ上 (FUNAKOSI-NINOUE) 遺跡は、福岡県浮羽郡田主丸町大字船越字二ノ上・栗田・瀬戸口・宮ノ前・南小川に所在する。

遺跡の所在する田主丸町は人口約23,000人、面積50.99km<sup>2</sup>で、稲作の他に、植木・苗木・カキ・巨峰の生産を主要産業とする、農産業を基盤とする町である。

町の南には屏風山とも呼ばれる水縄山地が聳え、山頂を境に星野村、上陽町と接する。水縄山地は古生代の変成岩と中生代の花崗岩から成り、長い浸食作用のため、802mと低い。また中腹からは小河川が数条流れ出ており、ふもとに複合扇状地を形成する。北には両筑平野と呼ばれる広大な平野が広がる。その北には九州第一の河川筑後川が流れ、この川を境に甘木市、朝倉町と面している。さらに東の吉井町、西の久留米市に挟まれる。



第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

両筑平野は筑後川の堆積作用により形成された沖積平野で、現在は大半が水田として利用される。暴れ川としても有名なこの筑後川は、氾濫する度に河道を変え、上流から運ばれる上砂の堆積によって、いたる所に自然堤防・後背湿地などの地形を生み出した。地形図を検討すると、水田の形状から旧筑後川の河道が復元出来る。

当遺跡は筑後川と美津留川に間に立地する。東西に長い遺跡内では、高所と低所で約2mの高低差が認められるが、集落遺構はこの高地で検出された。また、低地では大小様々な溝が検出された。平野部から発見される集落遺跡の多くはこの様な微高地に立地しており、この状況は現在の集落立地の景観と変わらない。<sup>註1</sup>

## 2 歴史的環境

ここでは、船越二ノ上遺跡に関連する古墳時代～古代の周辺遺跡を中心に取り上げる。

### 古墳時代

水繩山麓一帯は古くから装飾古墳の多い所として有名であり、これに関する報告・研究も数多い。町内では大字益生田に所在する西館古墳が1994年に調査され、同心円文・人物像等が描かれた装飾古墳として注目を浴びた。この他、国指定史跡の寺徳古墳が1997年から調査されている。装飾古墳以外にも、田主丸町内には益生田古墳群・麦生古墳群・平原古墳群など数多くの古墳が分布しており、県下でも有数の古墳密集地帯として知られている。この中で、大字石垣に所在する大塚古墳は、旧米径60mの大型円墳と考えられていたが、平成4年度以降継続的に実施されている墳丘範囲確認調査で全長100mを越す前方後円墳であることが確認された。

古墳群の位置する山麓部が著名であるのに対し、造墓集団の生活域である平野部の調査はほとんど進んでいなかった。しかし1979年から始まった浮羽バイパス建設に伴う発掘調査は、それまで未知であった平野部に大きなトレンチを入れる結果となった。この調査では古墳時代前・中期の竪穴住居跡が検出された浮羽町塚堂遺跡、古墳時代後期の竪穴住居跡が検出された吉井町大塚遺跡、鷹取五反田遺跡など古墳時代の集落関連遺跡が次々と発見され、次第に様相が明らかになってきた。また近年大規模に行われている圃場整備事業にともなう発掘調査によって、さらに良好な資料が蓄積されつつある。

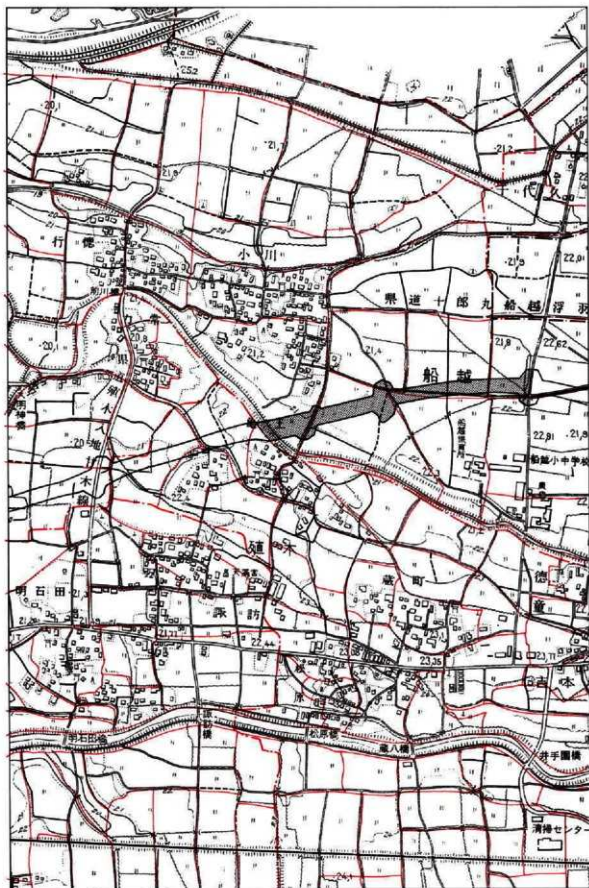
### 古代

旧筑後国内の古代遺跡は、久留米市の筑後国府跡、高良山神籠石、小郡市の小郡官衙遺跡、井上廃寺と周辺遺跡、上岩田遺跡、大川洗町の下高橋官衙遺跡等が著名である。「和名抄」によると、古代の筑後国は10郡からなり、田主丸町は旧竹野郡にほぼ相当する。竹野郡衙は三明寺地区に比定されているが、確証は得られていない。田主丸町内の古代遺跡としては殖木所在のシメノ遺跡がある。竪穴住居跡、掘立柱建物、欄列で構成され、奈良時代～平安時代初期に比定されている。他に、水繩山地の後線直下に位置する「井樋宮」と呼ばれる祠の周辺では、8世紀中頃から10世紀初頭の土器が採集されている。中には須恵器転用硯、墨書土器も含まれており、岩峰祭祀遺跡として重要である。

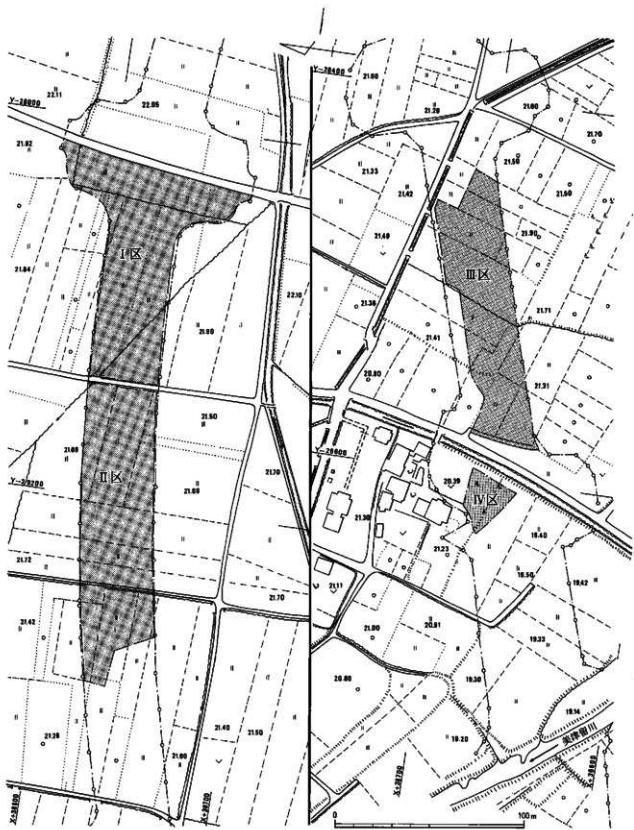
また、田主丸町を含む水繩山麓一帯は、国内有数の条里地割の痕跡を留める地域としても知られる。田主丸町内では巨瀬川以南に最もよく残り、以北では当遺跡の位置する船越・常磐地区付近に遺存している。西側には顕著な条里痕跡は残らない。吉井町塚堂遺跡では地割に整合した直線的な溝が検出されており、条里に関連する水路の可能性が指摘されている。

註1 位置と規模については、田主丸町誌編纂委員会『田主丸町誌』1996 によるところが多い。





第2図 調査区周辺字図および条里の復原 (1/10,000)



第3图 调查区位置图 (1/2,000)

### Ⅲ 発掘調査の記録

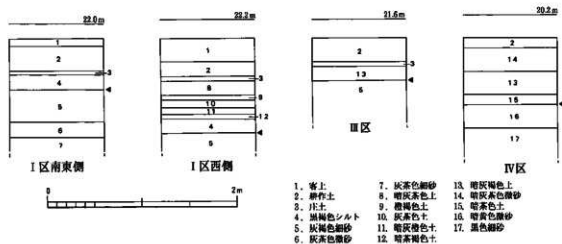
#### 1 基本層序（第4図）

I区南東側は、水田耕作土・床土の下層に黒褐色シルトが約20cmの厚さで堆積する。この層には遺物が若干含まれていた。さらにその下層には、灰褐色細砂がラミナ状に堆積する。遺構はこの層の上面に切り込まれており、この面を遺構検出面とした。なお、この灰褐色細砂層および更にその下層は遺物を全く含んでおらず、下層には遺構はないものと判断した。

I区西側は南東側とは状況が全く異なっており、水田耕作土・床土の下層に図示したような砂質シルト系の無遺物層が何層も薄く堆積する。遺構は灰茶褐色微砂に切り込まれており、この上面を遺構検出面とした。

Ⅲ区は、水田耕作土・床土の下層に黄灰褐色土が堆積する。その下層には灰褐色土が堆積し、遺物を含む。さらに下層には明灰褐色微砂が堆積し、遺構はこの上面に切り込まれる。従って、この面を遺構検出面とした。

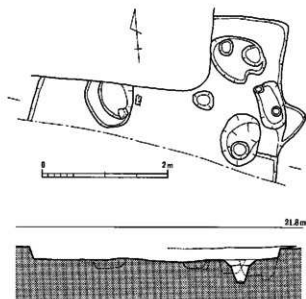
IV区は耕作土・床土の下層は暗灰茶色微砂が堆積し、その下層にⅢ区でも見られた灰褐色土が堆積する。このIV区で検出した旧河川はこの層を切り込んでいる。さらに下層は暗茶色土から暗黄色微砂へと漸移的に変化する。遺構は暗茶色土に切り込まれるが、検出が困難であったため、暗黄色微砂の上面を遺構検出面とした。



第4図 船越二ノ上遺跡基本層序模式図 (1/40)

#### 2 I区の調査

I区は船越二ノ上遺跡の最東端に位置し、調査以前は水田・畑地として利用されていた所である。調査区は東西に長く、東側は町道と接続するため南北に拡張する。調査は平成6年度に大半を終えたが、東側の一部が未買収だったため、この部分については用地買収終了後の平成9年度に調査を実施した。試掘調査の結果、ほぼ全域に亘って遺構が確認されたため、全面調査を実施した。調査面積は5,500㎡。遺構検出面の標高は南東端で21.5m、北東端で20.8m、中央南端で21.3m、中央北端で21.3m、南西端で20.8m、北西端で20.8mを測り、西側と東側では約70cmの比高差がある。南東端が最も



第5図 I区1号竪穴住居跡実測図 (1/60)

高く微高地となっており、ここでは竪穴住居跡等の集落遺構を検出した。それ以外の場所では大小多くの溝を検出した。

検出した主な遺構は、竪穴住居跡5棟、土坑2基、溝37条、落ち込み1基である。

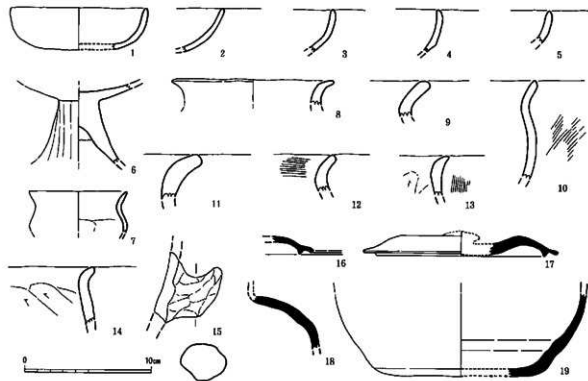
#### 竪穴住居跡

##### 1号竪穴住居跡 (図版2-1、第5図)

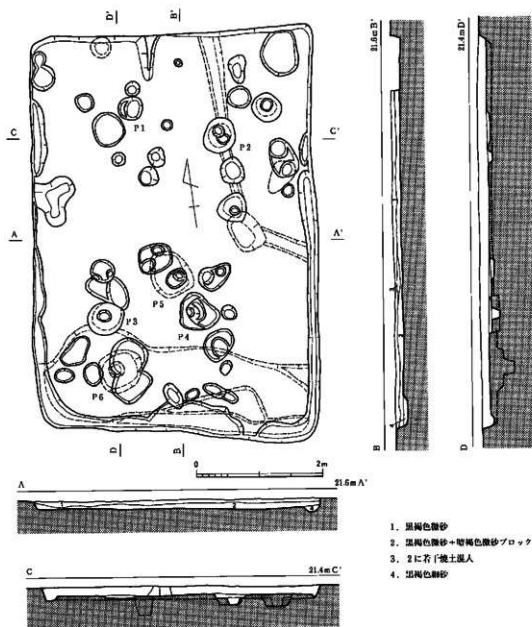
調査区の南端部で検出した。2号竪穴住居跡と重複しており、2号竪穴住居跡より古い。南半分は調査区外へと続く。平面プランは方形、もしくは長方形となすと考えられる。壁の立ち上がりはゆるやかである。壁小溝及び床面下層の構造は確認できなかった。主柱穴はP1を検出している。遺物は土器の他に土錘、磁石が出土している。

#### 出土土器 (第6図)

1～5は土師器碗。1は口縁部が直立、2はやや外傾、3・4は内湾気味に直立する。5は器壁が厚く胎土もやや粗い。6は直線的に広がる土師器高坏の脚部で、外面はヘラケズリ調整を行う。7は小型の甗で、頸部は締まらず口縁部は短く外反する。胴部内面はヘラケズリ、それ以外はナデ調整を行う。8～14は土師器甕。いずれも口縁部を強く横ナデして外反させる。胴部は内面縦ヘラケズリ、



第6図 I区1号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

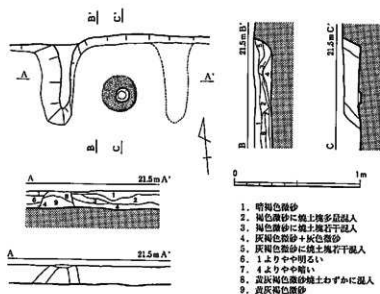


第7図 I区2号竪穴住居跡実測図 (1/60)

外面縦ハケ調整を行う。12は口縁部内面にハケ目が残る。15は土師器甕の把手で、指ナデ整形を行う。16・17はほぼ同形となる須恵器坏蓋で、断面三角形のかえりが口縁部より下に突出する。18は須恵器短頸壺の肩部であろう。内外面回転ナデ。19は須恵器壺の底部で内外面を回転ナデ、底面をヘラケズリにより仕上げている。

#### 2号竪穴住居跡 (図版2-1、第7図)

調査区の南端部で検出した。1号住居と重複し、1号住居より新しい。平面形態は南北6.5m、東西4.4mの長方形プランを呈しており、当時期の竪穴住居跡としては他に例を見ない形態である。主軸をほぼ真北にとり、北壁ほぼ中央にカマドを設置する。壁は緩やかに立ち上がり、南壁全部及び東西壁の一部に壁小溝を検出した。主柱穴はP1～P4を検出し、住居に関連する柱穴としてP5、P6を考えている。床はほぼ全面に張り床が施されており、床面下層では南側で浅い掘りこみを検出し



第8図 1区2号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)

た。遺物は土器の他に土鏃、石製紡錘車出土している。  
 2号竪穴住居跡カマド(第8図)

北壁に設置する造り付けカマドである。遺構確認段階で焼土の広がりが認められ、およそカマドの位置は判断できたが、袖の位置が不明瞭だったため結果的にカマドの右袖を検出できなかった。支脚抜き取り穴は壁から約35cmの所に位置する。抜き取り穴付近は焼土が広がるが、被熱による赤変は認められなかった。

袖には粘土を使用せず、黄灰褐色微砂を積み上げて構築する。カマド内覆土は自然堆積である。  
 出土土器(第9図)

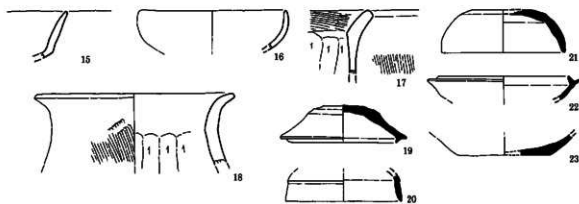
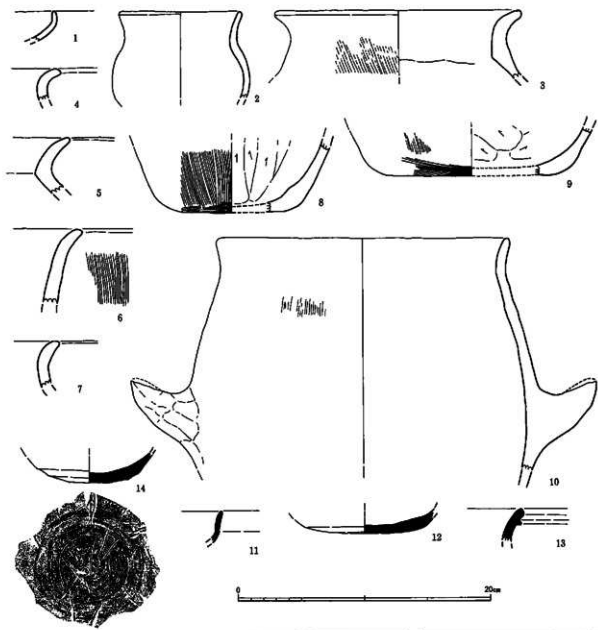
1は土師器碗。口縁部が短く直立する。胎土は精良。2は球形胴の土師器甕で、頸部は縮まらず口縁部は緩やかに外反する。内外面ナデ調整を行う。3~9は土師器甕。3~5は口縁部が短く外反するもので、内外面横ナデ。6は胴部から口縁部へと直線的に開くもので、口縁部はほとんど外反しない。甕ではなく甔の可能性もある。8・9は平底に近い。内面ヘラケズリ、外面ハケ目調整を行う。10は土師器甕。胴部上半はやや内傾し、口縁部は緩く外反する。把手は指ナデで整形する。外面は縦ハケ、内面は器表の剥落が著しいがヘラケズリであろう。11・12は須恵器杯。11は屈曲部が不明瞭で、口縁部はやや外反する。12は平底に近く、外面回転ヘラケズリを行う。13は須恵器甕口縁部の小片で、端部からやや下がった位置に三角突帯を貼り付ける。14の塗は外底面にヘラ記号を有す。

### 3号竪穴住居跡(図版2-2、第10図)

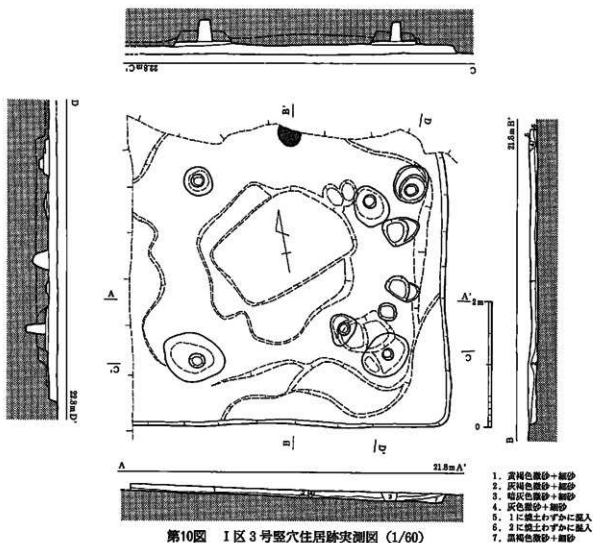
調査区南端部で検出した。北側、西側を掘乱で破壊されているが、一辺5m程度の方形プランとなる。カマド本体は掘乱を受け遺存していないが、北隅中央で焼土が検出されたため、北方向にカマドを付設したと思われる。全体的に残りが悪く、深さ12cm程度にすぎない。壁小溝は確認できなかった。支柱穴はP1~P4を検出しており、全て柱痕を確認した。床面はほぼ全面に張り床を施しているが、床面硬化は確認していない。床面下層は壁に沿って周囲を浅く掘りくぼめ、中央が島状に高くなる。また柱の立て替えを行った様でP2・P4に隣接するピットを検出した。遺物は土器の他に敲石が出土している。

### 出土土器(第9図)

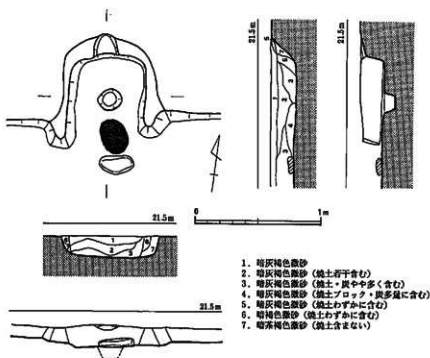
15・16は土師器碗。15は屈曲部は稜をもたず、口縁部は直線的に開く。胎土に砂粒を若干含む。16は口縁部が直立する。胎土は精良。17・18は土師器甕。17は頸部が縮まらず口縁部が短く外反しており、甔の可能性もある。胴部内面縦ヘラケズリ、外面縦ハケ、口縁部内面横ハケ、外面横ナデ調整を行う。18は頸部が緩く縮まり、口縁部は短く外反する。胴部内面縦ヘラケズリ、外面縦ハケ、口縁部は横ナデ調整を行う。19~21は須恵器甕。19はかえりが口縁部よりも外側に出る。床面下層から出土。



第9图 I区2·3号竖穴住居跡出土土器実測图(1/3)



第10図 I区3号竪穴住居跡実測図(1/60)



第11図 I区4号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)

20は屈曲部に不明瞭な稜をもつ。21は器壁が厚い。22・23は須恵器坏。22は立ち上がり、受け部ともに短い。住居内ビットから出土。23は平底となるもので、他に類を見ない。外底部は回転ヘラケズリ調整を行う。主柱穴掘りかたから出土。

4号竪穴住居跡(図版2-3、第12図)

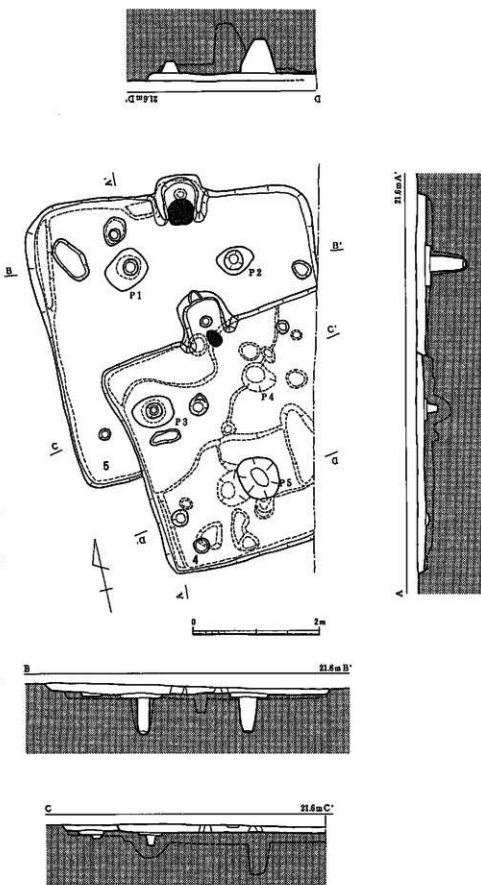
調査区の南端近くで検出した。5号竪穴住居跡と重複し、これより新しい。東側が調査区外へと



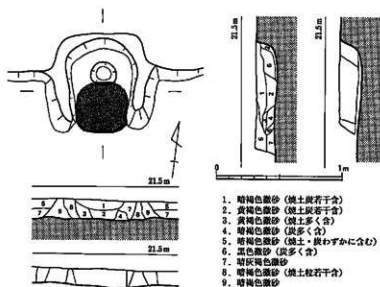
続くが、一辺3.5m程度の方形プランとなる。カマドを北壁中央に付設し、主軸を北北西にとる。残りは悪く、深さ10cm程度にすぎない。床面では幾つかのビットを検出したが、主柱穴となりうるのはP5のみである。張り床は全面に施されるが、床面硬化は確認できなかった。床面下層は不整形な掘り込みが行われる。P5に隣接して深いビットを検出しており、柱の立て替えを行っている。

4号竪穴住居カマド (図版3-1、第11図)

北壁中央に付設するカマドで、壁を掘り込み外側へと大きく突出する。カマドには粘土を使用せず暗褐色系の微砂を使用し、掘りかたを取り囲むように積み上げている。袖は内側へと若干伸びる程度である。支脚抜き取り穴を奥壁から約25cmの場所



第12図 I区4・5号竪穴住居跡実測図 (1/60)

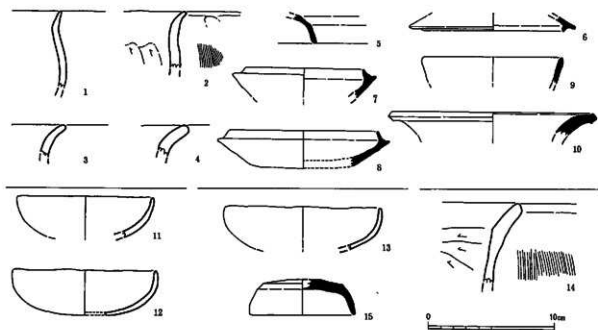


第13図 I区5号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)

側に出る。7～9は須恵器杯。7・8は立ち上がり、受け部ともに短い。8は比較的シャープな作りである。9は高台付の杯か。口縁部が直線的に開く。10は小型の須恵器甕で、口縁部が大きく開く。内外面回転ナデ。

5号竪穴住居跡(図版2-3、第12図)

調査区の南端部で検出した。4号竪穴住居跡と重複し、これより古い。東側は調査区外へと続く。西壁4.5m、北壁4.3mを測る隅丸方形プランで、北壁中央にカマドを付設し、主軸を北北西に向ける。床面までの深さは約20cmを測る。床面でP1・P2を、また4号竪穴住居跡内でP3・P4の計4つの支柱穴を確認した。張り床は全面に行われ、床面下層はほぼ平坦である。



第14図 I区4・5号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)

検出し、その手前は被熱し、赤変・硬化が認められた。カマド内は自然堆積の状況を呈す。

出土土器(第14図)

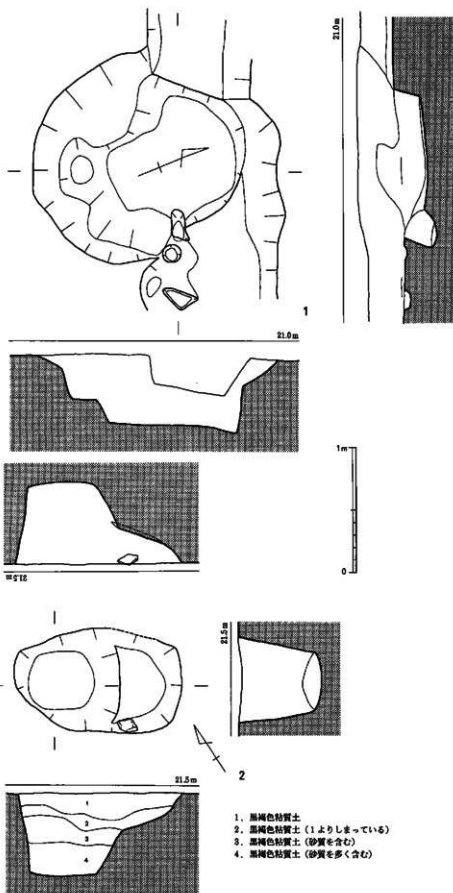
1～4は土師器甕。1は小型の甕で、口縁部は短く直立し、端部は尖る。内外面ナデ調整。貼り床下層出土。2は口縁部が緩く外反する。3・4はやや強く外反する。2～4は端部を丸くおさめる。3は貼り床下層出土、4はカマド内出土。5・6は須恵器蓋。5は器蓋が薄く、シャープな作りである。貼り床下層出土。6はかえりが短く外

5号竪穴住居跡カマド (図版3-2、第13図)

北壁中央に付設し、壁を掘り込みカマド本体のほぼ半分が外側へと突出する。カマドには粘土を使用せず暗褐色微砂を使用し、掘りかたを囲むように積み上げる。袖は内側へ約40cm程伸びる。支脚抜き取り穴を奥壁から約20cmの所で検出し、その手前は被熱し赤変する。カマド内は自然堆積の状況を呈す。

出土土器 (第14図)

11~13は土師器碗。いずれも屈曲部をもたず、口縁部を内湾させる。胎土は比較的精良である。14は土師器甕。体部が直線的に開き、さらに口縁部が緩く外反する。体部内面横ヘラケズリ、外面縦ハケ、口縁部は横ナデ。15は須恵器蓋。器壁が厚く、天井部が平坦である。



第15図 1区土坑実測図 (1/30)



## 土坑

### 1号土坑（図版3-3、第15図）

調査区西端で検出した。1号溝と重複するが、新旧関係は確認できなかった。平面形は長軸195cm、短軸170cm測る不整形円形で、ある。両側にはテラス状の段があり、また底面は北側がやや深くなるが、ほぼ平坦に掘られている。深さはテラス部で35cm最深部で60cm測る。

遺物は全く出土しなかった。

### 2号土坑（図版4-1、第15図）

調査区の南端部住居近くで検出した。平面プランは、南北80cm東西130cm楕円形をなし、底面は検出面から深さ65cmを測り、ほぼ水平となる。東側に検出面から深さ30cmテラスを有する。覆土は黒褐色粘質土の自然堆積である。

遺物は全く出土しなかった。

## 溝

1区では合計37の溝を検出した。大半が幅20~30cm、深さ30cm程度の浅い溝で、無秩序に奔走する。覆土は自然堆積であり、遺物を含まないものが多い。

ここでは、比較的幅が広く、一定の規格性をもつ溝のみ説明を行う。

### 1号溝（図版4-2・3、第16図）

調査区の南側に位置する。調査区外の部分も含め、約102mの長さにわたって東西方向に直線的に伸びる。軸は真北より81°振れ、21・22・23号溝と直交し、27・29号溝と平行する。幅は東側で180cm、中央で200cm、西側で70cmを測る。深さは東側が最も深く80cmを測るが、溝底はどの場所でも標高20.6m前後を測り、ほぼ水平に掘削されている。土層を観察すると、最低1回の掘り直しが確認できる。最初の溝は断面逆台形に掘削され、壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は茶褐色微砂を基層とする自然堆積の状況を呈し、最下層では鉄分沈着が認められ、滯水が想定される。2回目の溝は最初の溝より約20cm程浅く、断面逆台形に掘削される。壁の立ち上がりは急である。覆土は赤褐色シルトを基層とする。最初の溝に見られた鉄分沈着は認められない。

遺物はわずか1袋程度出土しているにすぎない。

## 出土土器（第17図）

2は須恵器甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面は同心円の当具痕が残る。暗灰色を呈し、胎土に細砂を若干含む。

### 5号溝（図版5-1・2第16図）

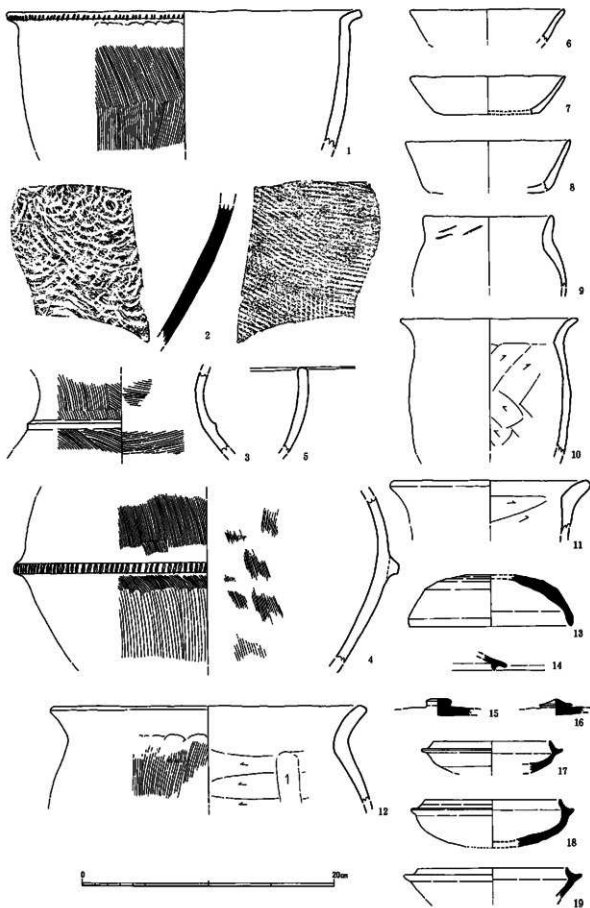
調査区中央付近で検出した。3・4・7号溝と重複し、4・8・9・18号溝とほぼ平行する。やや蛇行しながら南北へ伸び、長さ35mを測る。深さ30cm前後、幅は1m前後。覆土は灰褐色微砂を中心とする自然堆積で、土層を観察によると1回の掘り直しが行われている。

### 9号溝（図版5-2、第16図）

調査区中央で検出した。南北方向へと伸び、4・5・8・18号溝とほぼ平行する。長さ約40m、深さは35cm、幅は80cmで、断面逆台形となる。覆土は灰褐色微砂を基層とし、自然堆積の様相を示している。

### 21号溝（図版6-1・2、第16図）

調査区西寄りで検出した。軸は真北より28°東に振れ、22・23号溝と平行し、1号溝と直交する。一部途切れるが、長さ41m、幅100cm、深さ30cmを測る。溝底はどの場所も標高20.9m前後を測り、



第17图 I区溝・落ち込み等出土土器实测图(1/3)

ほぼ水平に掘削される。断面は逆台形。覆土は暗茶色土および灰茶色砂質土の自然堆積である。遺物は出土していない。

22号溝 (図版5-3、6-2・3、第16図)

調査区西寄り、21号溝の西側で検出した。軸は真北より28°東に振れ、21・23号溝と平行し、1号溝と直交する。長さ41.5cm、幅100cm、溝底は北側で標高20.8m、南側で20.5mを測り、約30cmの比高差がある。断面は逆台形。土層観察では掘り直しが認められるが、新旧どちらも暗灰褐色土の自然堆積である。遺物は出土していない。

23号溝 (図版5-3、6-2・3、7-1、第16図)

調査区西寄り、22号溝の西側で検出した。軸は真北より26°東に振れ、21・22号溝と平行し、1号溝と直交する。長さ33m、幅は北側で3.1mを測る。深さは最も深い所で90cm。溝底はどの場所も標高20.2mを測り、ほぼ水平に掘削される。断面は逆三角形。土層観察では少なくとも1度の掘り直しが認められる。新旧ともに自然堆積である。遺物はほとんど出土していない。

25号溝 (第16図)

調査区西寄り、23号溝の西側で検出した。蛇行しながら南北に伸びる。長さ10m、幅30cm、深さ20cmを測る。覆土は自然堆積。遺物は出土していない。

26号溝 (第16図)

調査区西側、1号溝の南側で検出した。1号溝とほぼ並行し、東西に直線的に伸びる。西側は削平され途切れる。長さ26m、東側で幅110cm、深さ40cmを測る。断面は逆台形に近い。土層観察では数度の掘り直しが行われた様である。溝底面には鉄分が沈着する。遺物は出土していない。

27号溝 (第16図)

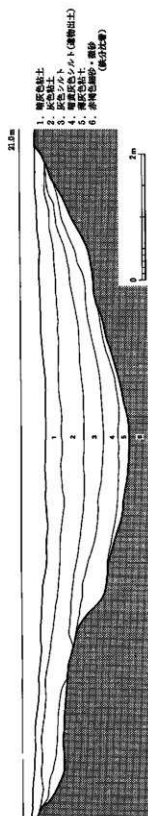
調査区西側で検出した。1・26号溝と重複し、当溝の方が古い。若干弧を描きながら北東-南西方向に伸びる。長さ8.5m、幅90cm、深さ70cmを測る。断面U字形。覆土は自然堆積。遺物は出土していない。

落ち込み (図版7-2・3、第18図)

調査区北東で検出した、南北に長い不整形の落ち込みである。長軸25.5m、短軸10.5mを測る。堆積状況確認のため、中央付近に東西方向のトレンチを一本設定した。

遺構は周囲から中心に向かってなだらかに落ち込んでおり、中央では深さ140cmを測る。土層観察によると、覆土は上層に灰色粘土、下層に暗黄灰色シルト、最下層に薄灰色シルトが堆積する。最下層の底部には広範囲にわたる鉄分沈着がみられ、長期間にわたる滞水があったことが窺える。

遺物は4層暗黄灰色シルトからわずかに出土したが、他の層からは出土しなかった。



第18図 Ⅰ区落ち込み土層実測図 (1/60)

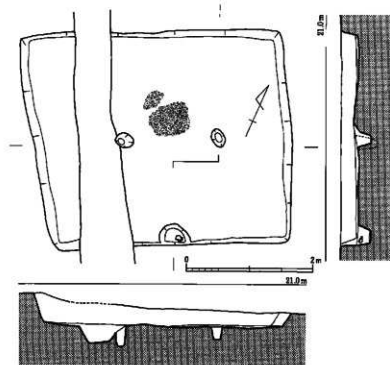
### 出土土器（図版20、第17図）

1は弥生土器甕。口縁部が短く外反し、下端部に浅く小さな刻目をいれる。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ、口縁部は横ナデ調整を行う。胎土に石英・長石・赤褐色粒を多く含み、肌褐色を呈す。4層出土。

### ピット等出土土器（第17図）

3・4は弥生土器壺。3は二重口縁壺の頸部で、頸部はあまり締まらない。頸頸境に三角突帯を引き出す。内外面ハケ調整。4は胴部片で、最大径部に断面台形の刻目突帯を貼付する。刻目はハケ工具による。内外面ハケ調整を行うが、胴部下半と上半とはハケ工具が異なる。5は弥生土器碗。口縁部が直立し、端部を四角くおさめる。内外面横ナデ調整を行う。胎土に細砂をやや多く含み、肌灰色を呈す。6～8は土師器杯。いずれも体部が直線的に開く。胎土は精良。口径は6・7が12.2cm、8が13.0cm。9～12は土師器甕。9は口縁部が短く直立する。胴部は丸く、小型の壺に近い。10は口縁部が強く外反する。胴部内面ヘラケズリ調整。11は頸部が締まらず口縁部が短く開く。12は頸部から緩やかに開いて口縁部へと至るもので、胴部内面ヘラケズリ、外面縦ハケ、口縁部は横ナデ調整を行う。胎土に粗砂を多く含む。13～16は須恵器蓋。13は器壁が厚く、口縁端部は丸い。14はかえりが口縁部の下に出る。比較的シャープな作りである。15・16は蓋のつまみ。どちらも低平なものである。

17～19は須恵器杯。立ち上がり、受け部ともに短く鋭いものである。



第19図 II区1号竪穴住居跡実測図（1/60）

## 4 II区の調査

### 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（図版9-1、第19図）

調査区中央北側で検出した。32・33号溝と重複するが、これより古い。主軸が25°東に振れる。北辺2.1m、南辺1.8m、東西辺1.7mの長方形プランになる。残存する深さは25cm。貼り床は確認できず、硬化面もない。床面で2本の主柱穴と両側で屋内土坑、中央やや北寄りに炉を検出した。

炉は炭が溜まるものの赤化・硬化面はなく、僅かに窪むのみである。出土遺物は少なく、屋内土坑より小型丸底壺が出土した。

### 出土土器（図版20、第23図）

1は頸部の締まらない小型丸底壺で口縁部が大きく開く。内外面僅かにハケが残り、後にナデ調整する。2は土師器碗。口縁部が直立し、器壁は薄い。口縁端部付近は横ナデ、他はナデ調整する。



## 2号整穴住居跡 (図版9-2、第20図)

調査区西端で検出した。主軸が東に約35°振れる。南北2m、東西3mの長方形を呈し、西側中央に僅かな突出部を持つ。残存する深さは12~18cm。中央やや西寄りで炉状のものを検出したが柱穴が見あらず、住居であるかどうか不明。南隅でピットを検出したが性格は不明。炉状遺構は5cm程掘り窪み、白色砂と炭が溜まる。埋土は自然堆積の様相を呈する。出土遺物はない。

### 土坑

#### 1号土坑

調査区やや西よりで検出。これから東は地形的にやや高くなっており、その裾部に掘り込まれる。長径5.5m、短径3.5mの楕円形を呈する。東側にテラスを、中央にピットを持つ。深さは20~30cmで壁は緩やかに立ち上がり、底面は丸くなる。北側に小溝がとりつぐが、新旧関係は確認できなかった。埋土は黒色土で、斜面を流れ落ちたように堆積する。出土土器 (第23図)

3はわずかに上げ底となる弥生土器甕の底部片。4は比較的薄手の土師器甕口縁部片で、口縁部は大きく開き、端部を上方につまみ上げる。

### 溝

Ⅱ区では合計44の溝を検出した。大半が幅20~30cm、深さ30cm程度の浅い溝で、無秩序に奔走するものである。覆土は自然堆積であり、遺物を含まないものが多い。

ここでは、比較的幅が広く、一定の規格性をもつ溝のみ説明を行う。

#### 28号溝 (図版9-3、第22図)

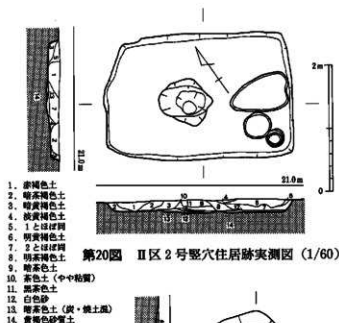
調査区西端で検出。29・30・41号溝と平行に走る。北西と南東は調査区外に延び、真北より東に35°振れる。幅約0.7~1.2m、深さは0.25~0.5mで北が浅くなる。断面逆台形で下層部はほぼ直に立ち上がる。1度掘り直しており、中央に杭の痕跡が数本残る。埋土は自然堆積で、最下層は砂と粘質土の堆積になる。

#### 出土土器 (第23図)

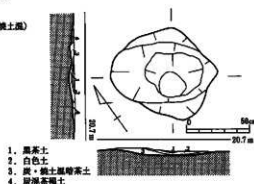
5は頸部が締まらず口縁部が短く開く土師器小型壺の口縁部小片。内外面ともナデ調整。

#### 29号溝 (図版9-3、第22図)

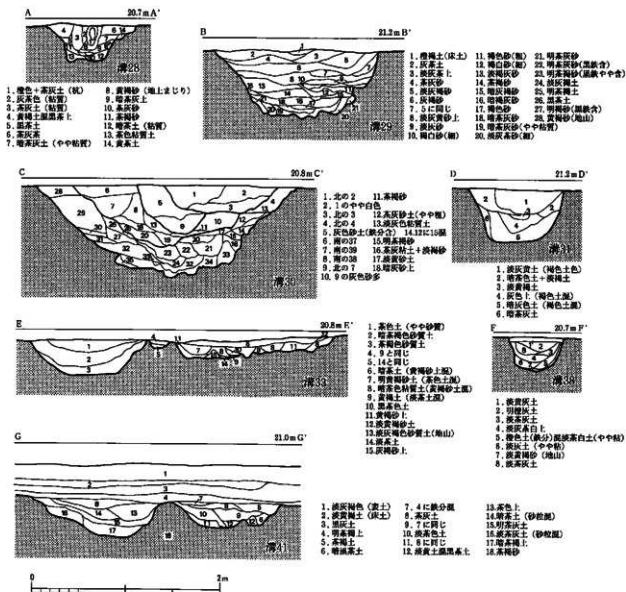
調査区西端で検出。28・30・41号溝と平行に走る。北西と南東は調査区外に延び、真北より東に45°振れる。幅は2m前後、深さは0.5~0.7mで北が浅くなる。埋土はほとんどが砂層で、底面は凹凸が激しく鉄分が沈殿する。土層が水平に近い形で堆積することから、緩やかな流れが想定できる。一度掘り直しがあがるが、規模は変わらないか逆に大きくなっている。30号溝と平行して走り、40号溝で繋



第20図 Ⅱ区2号整穴住居跡実測図 (1/60)



第21図 Ⅱ区2号整穴住居跡中央坑土坑実測図 (1/30)



第22図 II区溝断面土層実測図 (1/40)

がる形になる。遺構検出の段階では新旧関係は認められず、埋土の違いは若干あるものの同時期に存在したと考える。遺物は少なく下層から若干出土した。

#### 出土土器 (第23図)

6は土師器類。磨滅が激しく口縁部の横ナデが確認できるのみ。器壁が薄く小型のものか。

#### 30号溝 (図版9-3、第22図)

調査区西端出検出。28・29・41号溝と平行に走る。北西と南東は調査区外に延びる。少なくとも3度の掘り直しが見られる。最も古いものは幅2.8m前後、深さは0.8~1.2m。埋土は砂層と粘質土層の複層で、底面に鉄分の沈殿が見られ凹凸が激しい。肩は緩やかに立ち上がるが底部近くは挟れており、激しい水流があったと考える。次の溝は幅1.9m前後、深さ65cmでやはり鉄分の沈殿が見られる。埋土は砂層が中心になる。出土遺物はこの2つに集中して出土した。次は断面U字の溝で幅80cm前後、深さ50cm。埋土は下層は自然堆積だが、上層は一括廃棄と思われる。最新溝は幅1.2m、深さ25cmで、鉄分の沈着は見られない。埋土に耕作土が混入することから近世以降のものと思われる。29号溝と40号

溝でつながるのは2回目以降の掘り直しのものとする。

#### 出土土器（第23図）

7・8は土師器碗。どちらも口縁部小片。内外面ともナデ調整。9は土師器高坏。器壁の薄いもので、屈曲部から口縁部にかけては直線的に伸びる。内外面ナデ調整。

#### 31号溝（第22図）

調査区を南北に横断する溝で、幅80cm前後、断面逆台形を呈する。埋土は上層が灰色の耕作土で、掘り直しの可能性有り。近代の水路と思われる。下層も耕作土を含み、土師器が出土しているが混入と思われる。

#### 出土土器（図版20、第23図）

10は土師器碗。口縁部を横ナデ、体部内外面をナデ調整する。11は口縁部が直立する小型の土師器短頸壺で、磨滅が激しく調整不明。

#### 32号溝

33号溝と平行して走り、調査区中央で直角に折れ曲がる。北側では33号溝・1号竪穴住居跡と重複しこれより新しい。断面逆台形で立ち上がりは急である。幅約2m、深さは35cm程度、53mを検出したが両端とも調査区外に延びている。埋土は黄褐色土を中心とする自然堆積である。出土遺物はない。

#### 33号溝（第22図）

調査区中央部で検出、北西―南東に走り1号竪穴住居跡を切る。真北より30°東に振れており、28号溝等とほぼ同方向である。幅2m、深さは15cmほどしか残っていない。南側は削平されて消滅する。埋土は黒色ブロック混じりの黄褐色土で、自然堆積である。

#### 出土土器（第23図）

12は小型の土師器器台。口縁部は僅かにつまみ出した程度のものである。風化が著しく調整不明。

#### 37号溝

調査区西端で検出。41号溝と重複するがこれより新しい。南北溝で、中央で緩く湾曲する。総延長43mを検出したが、南北は調査区外へ延びる。幅1.0～1.6m、深さ約15cm。南へ行くほど広がる。埋土に砂層・粘土層は見られず、滞水の跡がなく、自然堆積である。出土遺物はない。

#### 40号溝

調査区西端で検出、29・30号溝を繋いでいる。検出時若干の埋土の差は見られたが、顕著な時期差はなくある時期2本を繋いで流れていたと考える。幅1m、長さ2m、深さ50cmで、上層は灰色土が、下層には砂質土が自然堆積する。30号溝とは若干高低差があり、29号から30号への流れ込みと考える。下端も30号に向かって広がるように落ちる。

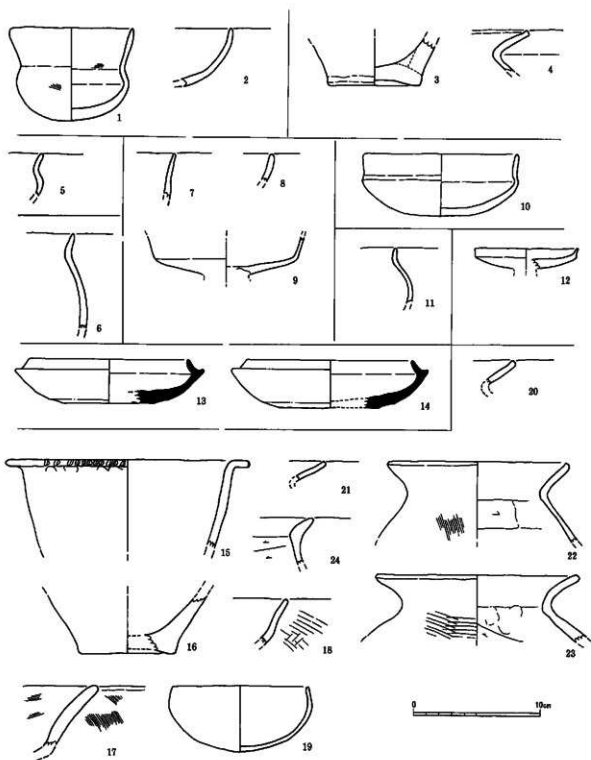
#### 出土土器（第23図）

13・14は須恵器环。双方とも天井平坦部のみを回転ヘラケズリし、その他は回転ナデを施す。口径・手法・受け部の形などほぼ同じもの。

#### 41号溝（第22図）

調査区西端で検出。28・29・30号溝と平行して走る。37号溝と重複するがこれより古い。北西と南東は調査区外に延び、真北より東に42°振れる。幅2m前後で若干蛇行する。北に向かって高くなり、北端は2号竪穴住居跡の南側で消滅する。埋土は砂層を含むほぼ平行な自然堆積。底面の荒れも見られない。出土遺物は小片で図化できない。

#### 包含層その他出土土器（第23図）



第23図 II区出土土器実測図 (1/3)

15は如意形口縁の弥生土器甕で、端部に刻目を入れる。口縁部の屈曲は強く、ほぼ水平になる。内外面ナデ調整を行う。16はやや上げ底となる弥生土器甕の底部。17は恐らく二重口縁甕の口縁部片であろう。内外面ハケ調整の後、横ナデを行う。18・19は土師器椀。18は外面に粗いハケ調整を行った後、内外面横ナデする。19は口縁部がやや内傾する。20～24は土師器甕。20～23はいずれも口縁部が

大きく開くもので、端部をつまみ上げ気味に仕上げる。器壁は薄い。22は屈曲部内面のやや下がった位置に横位のヘラケズリを行う。23は頸部が良く締まり、口縁部は湾曲しながら長く外反する。24は短く外反する口縁部で、内面は横ヘラケズリ。

## 5 Ⅲ区の調査

Ⅲ区は船越二ノ上遺跡の中央西寄りに位置し、調査以前は水田・畑地として利用されていた所である。調査区は東西に長い。試掘調査の結果、北東端および北西端で遺構が存在しない箇所が確認できたため、これを除く区域を調査区域とした。調査は平成6年度に用地買収の終了していた部分約1,500㎡を終了し、残りを平成7年度に実施した。調査面積は3,145㎡。

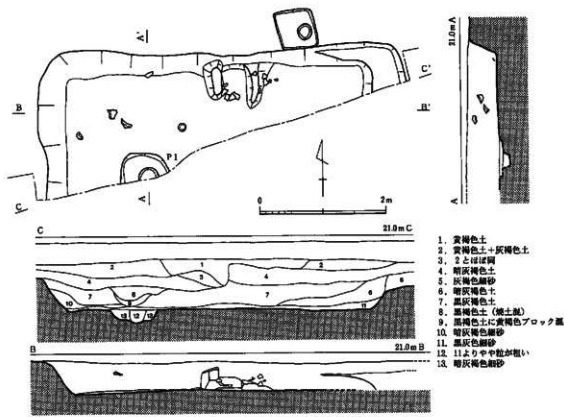
遺構検出面の標高は東端で20.9cm、中央で20.7m、西側で20.6mを測り、東側と西側とでは約30cmの比高差がある。遺構は竪穴住居跡をはじめとする集落関連遺構を、調査区のほぼ全域で確認した。

検出した主な遺構は、竪穴住居跡10、掘立柱建物跡2、土坑8、溝21である。古墳時代・古代の遺構は中央から西側にかけて分布する。

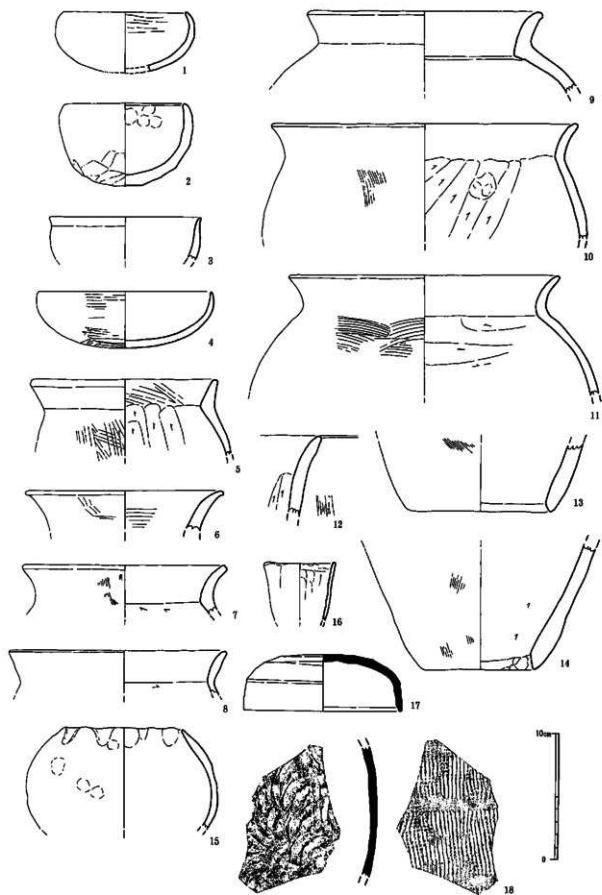
### 竪穴住居跡

#### 1号竪穴住居跡（図版11-1、第24図）

調査区中央北端で検出した。大半が調査区外へと続く。北壁は5.5mを測り、一辺5.5m程度の正方形プランとなるだろう。北壁のほぼ中央にカマドを設置し、主軸を北にとる。残りは良く深さ50cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。床面では主柱穴としてP1を検出した。掘りかたは径60cmを測る。また柱痕を確認しており、径20cm程度を測る。床面の貼り床は確認していない。覆土は自然堆積の状



第24図 Ⅲ区1号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第25图 Ⅲ区1号竖穴住居跡出土土器实测图(1/3)

況を呈す。

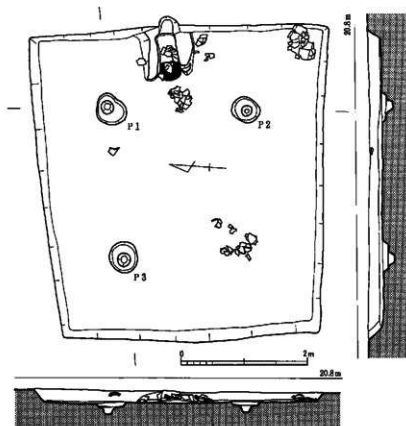
#### 1号竪穴住居跡カマド（図版11-3）

北壁中央に作り付けるカマドで、検出面から約20cm程掘り下げた所で確認した。煙道は確認していない。軸は左側が高さ30cm、長さ50cm、右側が高さ10cm、長さ70cmを測る。軸には粘土を使用せず、覆土と同質の土を使用する。カマド内側を精査したが、支脚の位置は確認できなかった。また、カマド前面には炭化物が広がっていたが、赤変は認められなかった。カマド内は自然堆積の状況を呈す。出土土器（図版20、第25図）

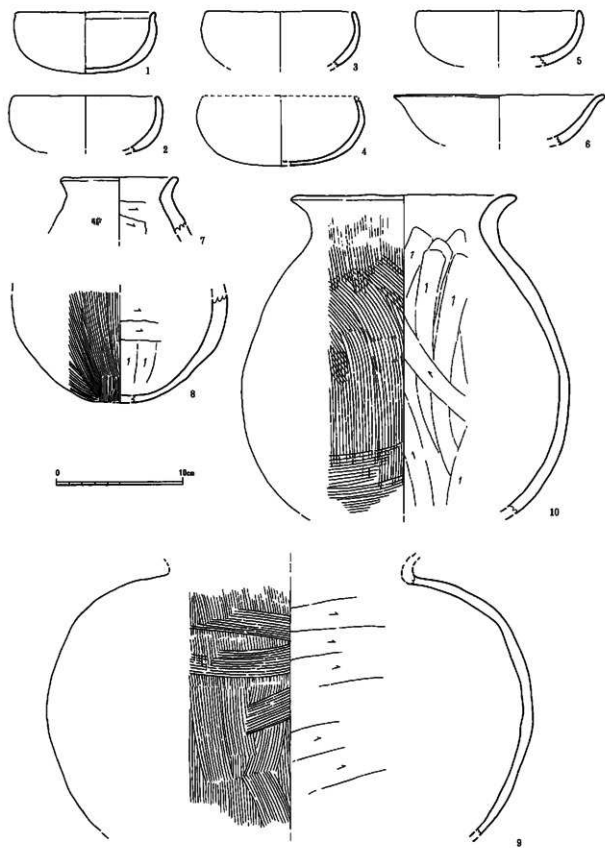
1～4は土師器碗。1は口縁部が内湾するもので、内面にヘラミガキが認められる。胎土は精良。2は厚手のもので、底部はヘラケズリ、他はナデ調整を行う。口縁部内面に指圧痕が残る。3は口縁部が外反するもの。4は口縁部が内湾気味に直立するもので、外面にヘラミガキが認められる。胎土は精良。5～11は土師器甕。5は肩があまり張らず、口縁部が短く緩く外反するもので、胴部内面縦ヘラケズリ、外面縦ハケ、口縁部内面横ハケ後に内外面を横ナデする。6は端部を尖り気味に仕上げる。7は端部を四角く仕上げる。8は口縁部が直線的に開き、器壁が薄い。9は頸部が強く縮まり、口縁部が短く外反する。屈曲部内面の稜は鋭い。10は肩が張らず、口縁部が緩やかに外反するもので、端部は丸い。11は頸部が強く縮まり、口縁部が外反するもので、屈曲部は稜を持たず丸い。胴部内面横ヘラケズリ、外面横ハケ、口縁部は横ナデ調整を行う。12～14は土師器甕。12は口縁部が直線的に開くもので、体部内面縦ヘラケズリ、外面縦ハケ、口縁部は横ナデ。13・14は一孔式の甕の底部である。内面縦ヘラケズリ、外面縦ハケ調整を行う。15は体部が球形となる土師器鉢で、全面指ナデ・指オサエ調整を行う。口縁部を指オサエで整形するため波打っている。16は製塩土器か。器壁が非常に薄く、全面指ナデ・指オサエ調整を行う。口径5.8cm。17は須恵器蓋。体部と口縁部の境および口縁部の段は不明瞭である。天井部のヘラケズリは全体の約1/4に及ぶ。口径12.4cm。18は須恵器甕の胴部破片で、内面同心円当て具、外面格子タタキ後一部横ナデ。

#### 2号竪穴住居跡（図版12-1、第26図）

調査区中央で検出した。東西4.1～4.7m、南北4.8～5.0mのやや台形のプランになる。主軸をほぼ真西にとり、西壁のほぼ中央にカマドを設置する。壁面は緩やかに立ち上がり、床面までの深さは20cm前後である。埋土は黒茶色で、西南部上層より土器の集束を



第26図 III区2号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第27图 Ⅲ区2号竖穴住居跡出土土器実測図①(1/3)



確認した。床面でP1～P4を検出するが、南西隅は柱穴を確認できなかった。いずれも地山の礫層に掘り込むことから礫のない部分を柱穴としたが、プランや深さは現状では不確定なものと思われる。東南隅では床面直上で甕を確認した。床は黄褐色土を使用して全面に敷き、西側がやや高くなるようである。床面下層は全面礫層となり、周囲も礫が広がる。

2号住居跡カマド(図版12-2、第28図)

西壁中央部に付設するカマドで、住居検出面から15cm程下で確認した。床と同様の黄褐色土や焼土混じりの暗茶色土で積み上げた後白色粘土を使用する。袖内に焼土塊、土器、ミニチュア土器

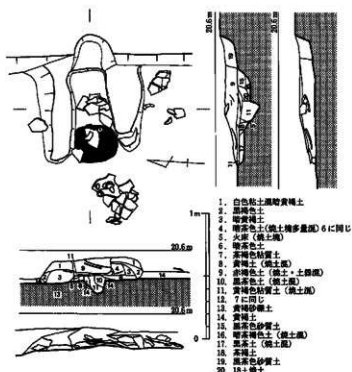
などが含まれることより、一度廃棄したカマドを再構築したことが考えられる。カマド内は一括堆積の状態で、埋土より甕・ミニチュア土器が出土した。またカマド前面に甕が1個体とミニチュア土器が置かれていることから、カマド祭祀を行ったことが窺える。周囲にもカマドに強り付いた状態で土器片を検出した。またこの際に支脚も抜き取られた様でほぼ中央に抜取穴が見られた。火床は支脚抜取穴の前面で確認した。

出土土器(図版20・21、第37・38図)

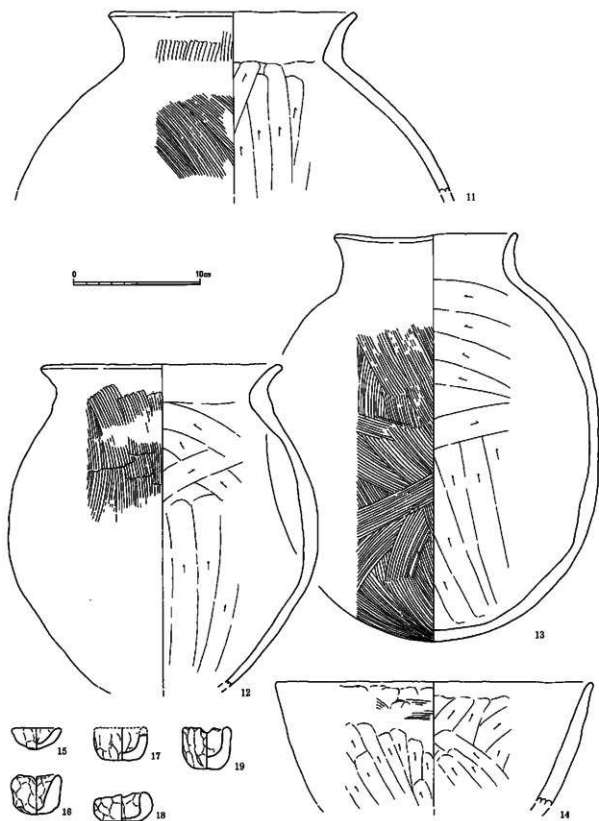
1～5は土師器椀。全て口縁部から体部中位までを横ナデ、底部付近にナデを施す。1は口縁端部をやや外側に屈曲させるもの。1は埋土の最上層、3・4は床面直上北壁際からの出土である。6は土師器高杯の坏部のみの破片資料。全体を横ナデ調整する。7～13は土師器甕。7は小型の口縁から胴部中位までの破片。口縁部は横ナデし、胴部外面は縦ハケ、内面はケズリを施す。8は胴部下位だけの資料で、外面は縦ハケを、内面は中位が横下位が縦のケズリを施す。9は胴部が大きく張る甕の胴部片で、最大復元径38.2cm。外面は縦ハケ後部分的に横ハケを施し、内面は横方向のヘラケズリを施す。10～12も底部まで残る物はなく、外面ハケ、内面ヘラケズリを施す。10・11は内面のケズリが縦のみだが、12は上位を斜に、下位は縦ケズリを行う。ケズリの単位は2.0～2.5cm。13は外面はややランダムなハケ調整、内面は上位が横下位が縦のヘラケズリを施す。口縁部付近は横ナデ。口径14.4cm、最大胴部径26.1cm、器高32.3cmを測る。8・9はカマド内から、10はカマド前面から、11・12は床面直上からの出土。14は小型の土師器甕で、内外面を縦ヘラケズリで調整する。口縁部付近は指圧痕と横ハケが僅かに見られる。15～20はミニチュア土器。全て手握ねで、カマド付近から出土。指圧痕が全面に残る。15は坏状で底部が丸くなり、他は鉢状で底部が平坦になる。口径は3.4～3.8cm。16はカマド右袖内、17はカマド前面、19はカマド内からの出土。

3号竪穴住居跡(図版13-1・2、第30図)

1号竪穴住居跡西側で検出した。4号竪穴住居跡と重複し、これより新しい。一辺約4mのほぼ正



第28図 III区2号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)



第29图 Ⅲ区2号竖穴住居跡出土土器実測图② (1/3)

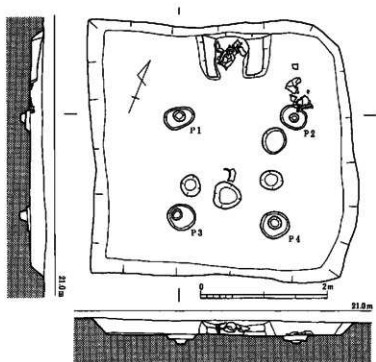
方形のプランとなり、礫層に掘り込む。主軸を西北にとり北壁やや東寄りにカマドを付設する。床面までの深さは約20~30cm残存しており、床面でP1~P4を検出。またカマド東南側床面で土器群を検出した。床には硬化面は見られないが黄褐色土で全面に掘り床を敷き、床面はほぼ水平になる。床下は地山の礫層となり、掘り込みなどは不要であったか。埋土は自然堆積の状況を呈する。

3号竪穴住居跡カマド (図版13-3、第31図)

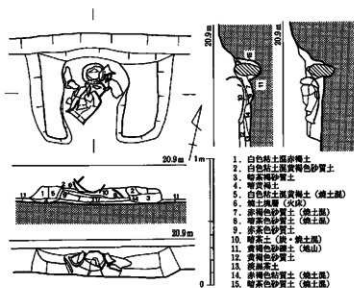
西壁付近で甕がつぶれたような状況を検出したが、カマドのプランが確認できず、住居検出面より10cm下でプランを確定した。甕はカマドのほぼ中央に横転したように置かれ、土圧によって押しつぶされた状況になる。またもう1個体の破片もあり、これは東南部の土器群の資料と接合した。これらは2号竪穴住居跡の様相と近似することからカマド祭祀の跡と考えられる。支脚はカマドのもっとも奥に設置されたままだり、炭化物は広がるが火床は認められなかった。埋土は上層が一括堆積の様相を呈する。

出土土器 (図版21、第32図)

1は土師器椀の小片で、全面をナデ調整する。2~8は土師器甕。2は頸部が締まる小型のもの。3は小型甕の口縁部から肩部の小片で、胴部内面を横ケズリ、口縁部を横ナデ、胴部外面を縦ハケする。4は口縁部は横ナデ、内面は縦ケズリを施すが、粘土の接合痕が明瞭に残る。外面は僅かに縦ハケが見えるが磨滅のため単位などは不明。5は口縁部横ナデ、胴部内面横ケズリ、外面を縦ハケで調整する。頸部内面に粘土接合時の指圧痕が残る。6は器高の低い甕で、口縁部内面と胴部外面を横ハケ、胴部内面をヘラケズリ、口縁部外面を横ナデ調整する。7は外面ハケ、内面ケズリの調整を施すが、頸部付近のケズリは横方向に施す。口径19.0cm、最大胴部径28.0cm、器高35.3cmを測る。8は長胴の甕で、胴部外面上位を縦、下

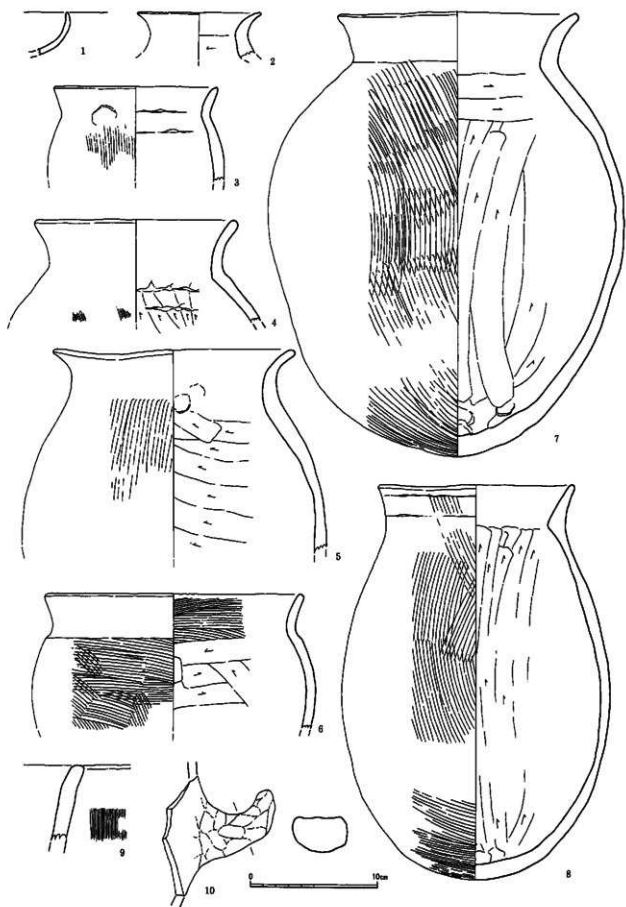


第30図 Ⅲ区3号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第31図 Ⅲ区3号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

1. 白色粘土面赤褐色土
2. 白色粘土面黄褐色砂質土
3. 褐色砂質土
4. 硬質黄土
5. 白色粘土面黄褐色土 (焼土層)
6. 焼土層 (火成)
7. 赤褐色砂質土 (焼土層)
8. 赤褐色砂質土 (焼土層)
9. 赤褐色砂質土
10. 暗赤土 (焼・焼土層)
11. 黄褐色砂質土 (地山)
12. 黄褐色砂質土 (地山)
13. 黄褐色土
14. 赤褐色粘質土 (焼土層)
15. 暗赤色砂質土 (焼土層)



第32图 Ⅲ区3号竖穴住居跡出土土器実測図(1/3)

位を横のハケ調整、内面を縦ケズリで調整する。口縁部付近は横ナデ。口径15.0cm、最大胴部径21.0cm、器高21.5cmを測る。3・6は中央から、9はカマド内と住居東北隅の接合資料、8はカマド内からの出土。9・10は土師器瓶。9は直口縁で、端部は丸い。10は把手片で、全面指ナデ調整。

4号竪穴住居跡（図版13-1、14-1、第33図）

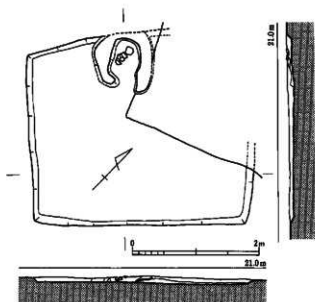
1号竪穴住居跡の西側に3号竪穴住居跡と重複して検出した。3号より古い。主轴を北西にとり、北西壁中央にカマドを付設する。全体の約1/4を3号竪穴住居跡によって削平されるが、長辺3.5m、短辺3.0mのプランになる。残りは悪く、約8cm程で地山の礫層になる。礫面を精査したが柱穴は確認できなかった。

4号竪穴住居跡カマド（第34図）

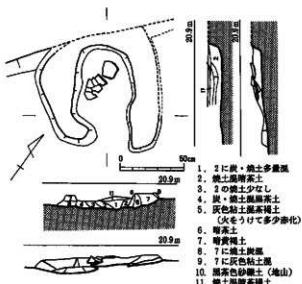
壁面にやや切り込む形で作る。平面プランは円形を呈し、暗褐色土を中心積み上げる。内からは壘片が出土したが堆積は自然のようである。支柱の抜取穴は確認できなかった。

出土土器（第35図）

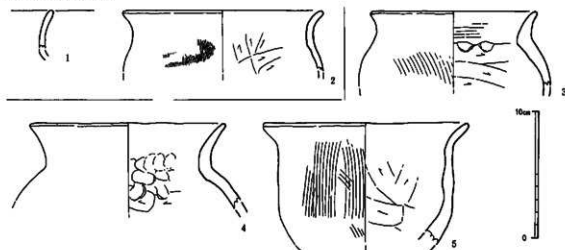
1は小型の土師器甕で、器壁が薄い。2も小型の土師器甕で、外面縦ハケ、内面横ケズリ、口縁部は内面を横ハケ後に横ナデ外面は横ナデを施す。



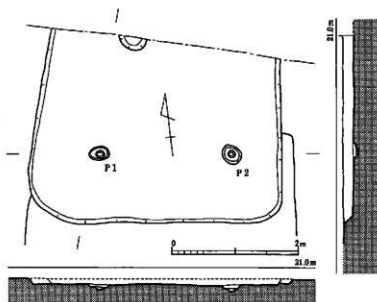
第33図 Ⅲ区4号竪穴住居跡実測図（1/60）



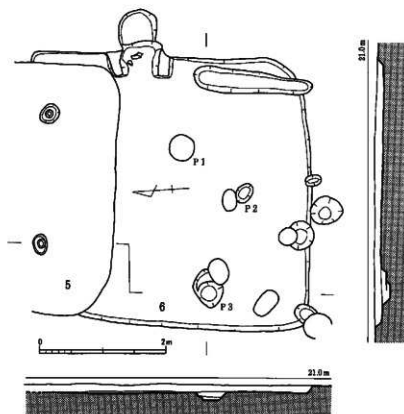
第34図 Ⅲ区4号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第35図 Ⅲ区4・7号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第36図 III区5号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第37図 III区6号竪穴住居跡実測図 (1/60)

7号竪穴住居跡 (図版14-3、第38図)

2号竪穴住居跡の南側で検出した。削平により残りが悪く、わずか5cmほどしか埋土がなかった。プランも現存で東西3.8m、南北3mを測るが、正確な数値は不明。主軸をほぼ北にとり、北壁ほぼ

5号竪穴住居跡 (第36図)

調査区東端の北壁際で検出した。6号竪穴住居跡と重複しておりこれより新しい。全体の1/3は調査区外に延びる。主軸を真北よりやや東にとり、カマドは見られないことから北側につくものか。東西約4mで、残りが悪く床面ぎりぎりと思われる。支柱穴P1・P2を検出。埋土(貼り床か)は東側が黄褐色粘質土、西側はやや砂質になる。出土遺物はない。

6号竪穴住居跡 (図版14-2、第37図)

調査区東端で5号竪穴住居跡と重複して検出した。6号に切られる。一辺3.4mの菱形のプランを持ち、主軸を東にとる。東壁のやや北寄りにカマドを付設する。P1~P3のビットを検出したが、どれも主柱穴にはなり得ない。残りは悪く検出面から地山まで約10cmである。

6号竪穴住居跡カマド

壁を外側に若干掘り込んで作る。床面も10cm程掘り窪め、窪みを中央として両脇に粘質土で袖を作る。袖の積み土は5cmほどしか残存していない。煙道は確認できず外側にカマドと同幅の掘り込みがある。焼土がたまることから、廃棄時に灰等をかきだしたものかも。火床は確認できず、中から甕が出土したが、図示に描えない。

中央にカマドを付設する。P1～P4を  
検出したが、地山が礫層のため正確な深  
さと規模は確認できなかった。

#### 7号竪穴住居跡カマド

削平により袖ないし火床は確認できな  
かった。壁面をやや外側に掘り広げて付  
設し、さらに外側に掘り込みを作る。周  
囲に若干炭が確認できたが、規模等は不  
明。付近から甕が出土。

#### 出土土器（第35図）

3～5はいずれも小型の土師器甕で、  
3は外面縦ハケ内面ヘラケズリを施す。  
4は外面を横ナデで仕上げ、内面は横方  
向のケズリを施す。頸部内面に接合時の  
指圧痕が残る。5は頸部の締まらないも  
の。3はカマド付近、5は住居東北隅床  
地山直上からの出土。

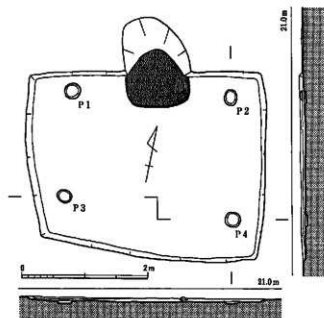
#### 8号竪穴住居跡（第 39図）

調査区西端南壁付  
近で検出した。全体の  
約1/2は調査区外  
にあり、また調査区  
内でも掘乱により一  
部削平される。主軸  
を北西にとり、北西  
辺5.4mを測る。北  
西辺中央にカマドを  
付設し、残存する深  
さは15～30cmである。  
床面で支柱穴P1・  
P2を検出した。埋  
土は上層が黒色ブロッ  
ク混じりの黄褐色土、

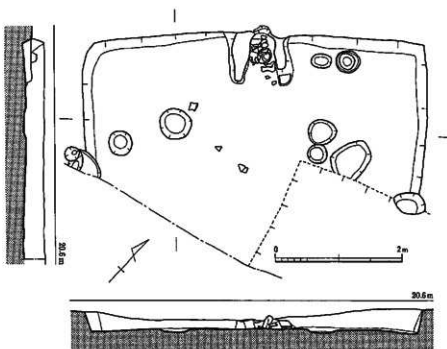
下層が暗茶色土とおおまかに分かれるが、自然堆積と思われる。床面は黄褐色土で全面貼り床するが硬化面は認められず、中央が少し高くなる。

#### 8号竪穴住居跡カマド（第40図）

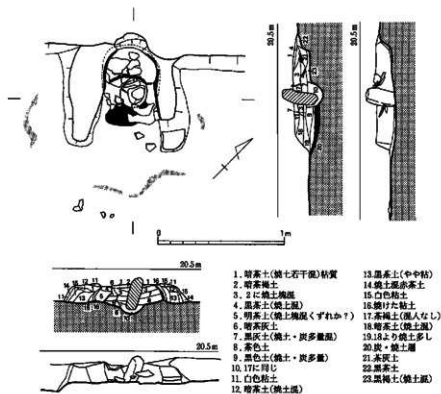
北西壁に付設したカマドは残りが比較的良好。内面と外面は白色粘土で固め、特に内面は粘土が火を受けて赤色・硬化し、天井部も赤色・硬化したものが落ち込んだ状態で検出できた。袖の長さは現



第38図 Ⅲ区7号竪穴住居跡実測図（1/60）



第39図 Ⅲ区8号竪穴住居跡実測図（1/60）



第40図 Ⅲ区8号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)

部のケズリが見え他は横ナデ。口縁端部をつまみあげて凹線を作り出す。4は調整不明。口縁部内面に横線がつく。5はナデ調整。6は土師器脚付壺か。下半部のみの破片。胴部は内外面ともナデ調整。脚部は指圧により整形した後ナデで調整する。7～11は土師器甕。7・8は小片で、外面にわずかにハケ目が見える。9は球形胴の小型甕で、磨滅がかなり激しい。外面に僅かにハケ目残り、内面は縦ケズリを施す。10は外面と口縁部内面にハケを施し、内面は横ケズリする。ハケ目は少し粗い。11は外面をヘラナデ後、丁寧にナデ消す。内面は頸部が横、胴部が縦のケズリ。12は大型の土師器鉢で底部を欠く。外面はハケ調整後部分的に横にナデ消す。内面は頸部付近は横、胴部は縦ケズリ。住居跡中央の床面直上より出土。13は土師器瓶の口縁部小片。外面と口縁部内面はハケ、胴部内面はケズリを施す。口縁部は平坦に作る。14は土師器甕である。外面をハケ調整し、後把手周辺を粗くナデ消す。内面は斜のケズリ。把手は断面楕円形で上方に大きく屈曲させる。口縁部はやや丸く収める。復元口径23.6cm、底径6.8cm、器高25.3cmを測る。15・16は須恵器甕で、15は底部、16は肩部片。外面は平行タタキで、内面は丁寧にナデ消す。15は内底に指圧痕が残る。

#### 9号竪穴住居跡(図版15-1、第42図)

調査区西側の10号土坑の北で検出した。長辺3.8m、短辺3.2mの長方形プランを呈し、主軸を北西にとる。カマドは北西壁面中央に壁を擁り込んで付設する。壁は緩やかに立ち上がり、現存で10cmほどの深さしかない。床面で主柱穴P1～P4を検出した。また北隅、カマドの脇で北西壁を外側へ掘り込んだ土坑を確認し、中には土器が溜まっていた。貼り床は明確ではなく、硬化面もなかった。埋土は自然堆積の様相を呈する。

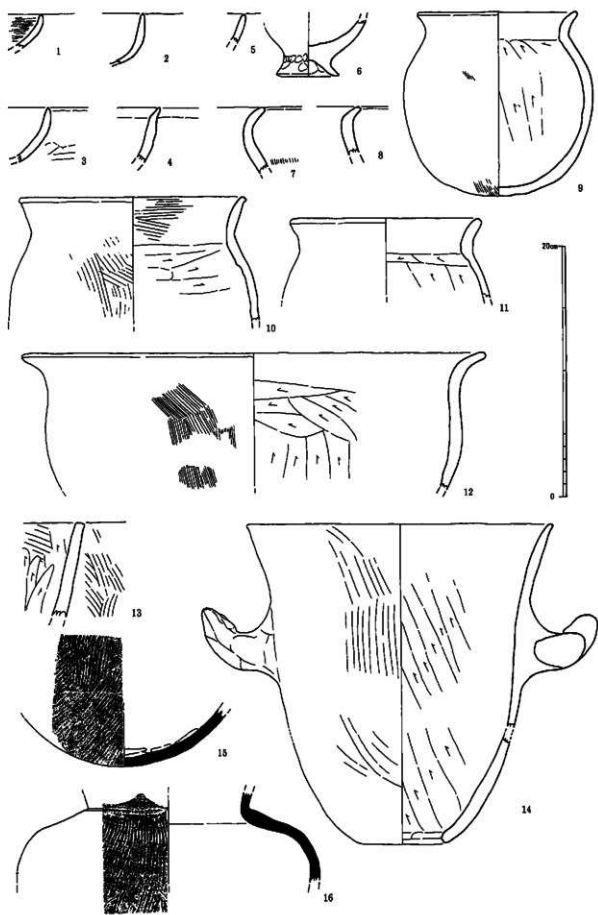
#### 9号竪穴住居跡カマド(第43図)

存長約80cm、高さは16cm。ほぼ中央に縦長の自然石を支柱に据える。その前面は赤色・硬化した火床がある。埋土は自然堆積の様相を呈し、中に土器が散乱する。カマドの周囲直径約1.3mには炭や焼土が散乱しており、そのもっとも外側に白色粘土が筋状に残存していた。またカマドすぐ脇にも同様の炭と焼土の散乱があった。煙道は壁面に直立させる様であるが、削平のため確認できなかった。

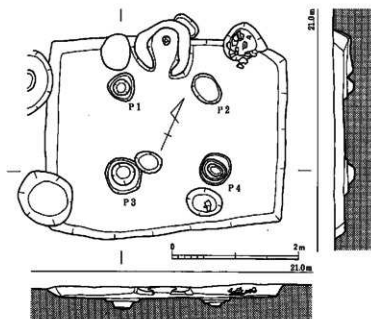
#### 出土土器(図版22、第41図)

1～5は全て土師器碗の口縁部小片である。磨滅が激しく全体の調整はわかりづらい。1は内面に細かミガキを施す。2は調整不明。3は外底

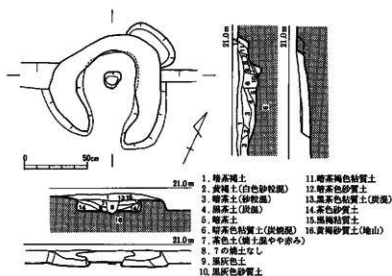




第41图 Ⅲ区8号竖穴住居跡出土土器実測図(1/3)



第42図 Ⅲ区9号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第43図 Ⅲ区9号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

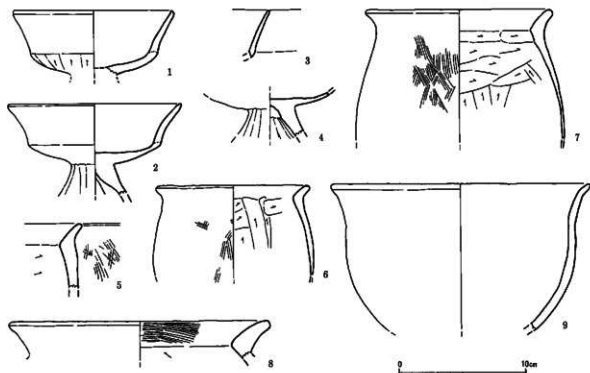
北西壁に取りつくカマドは、壁面を外側に掘り込んで黄褐色土で掘り形を取り囲むようにして積み上げる。平面プランは円形で、奥壁から15cmの場所に支脚の抜取穴を検出した。約10cmの深さで残存していた。炭や焼土は少なく赤色・硬化面は認められない。埋土は自然堆積の様相を呈し、支脚は後世の削平時に撤去されたものか。カマド内にほとんど遺物はなく、陶の土器溜まり土坑が炭や焼土を含むことから、廃棄時に清掃が行われたと考えられる。

#### 出土土器 (図版22、第44図)

1～4は土師器高坏。1は坏部のみ。口縁端部を内側に屈曲させるもので、器壁は厚い。内面と体部外面はナデ調整を施し、底部外面は縦方向のケズリで面取りする。体部と底部の境には粘土接合痕が見える。復元口径12.4cm、埋土最上部からの出土。

2は脚部下半を欠く。体部は薄く作られ外湾する。磨減が激しく坏部の調整は不明。ナデか。脚部内外面は縦位のケズリで面取りし、内面はその後になデる。

体部と底部の境に粘土接合痕が見られる。復元口径13.6cm、坏部高3.8cm。3は口縁部だけの小片で磨減が激しく調整は不明。4は底部と脚部の一部が残存。内底部はナデ、外底部は僅かに縦位の面取りが見える。脚部は内外面とも縦位の丁寧な面取りを施し、後に底部との接合付近を横ナデする。3・4はカマド脇の土器溜りより出土。5～8は土師器甕。5は口縁部だけの小片。口縁はナデ調整し、体部外面はランダムなハケ、内面は横位のケズリを施す。6も同様に外面にランダムなハケを施す。内面は上位に横の、下位に縦のケズリで調整する。器壁は薄く、口縁部の横ナデは工具痕が残る。復元口径11.6cm。カマド内から出土した。7は6よりやや大きい。器形・調整はほぼ同じ。胴部中位は剥離が激しく、原形をとどめない。復元口径14.3cm。8は口縁部だけの小片。内面は横ハケを施し、外面はナデ。内面に僅かにケズリが見える。復元口径20.2cm。5・7はカマド脇の土器溜りより、6はカマド内より、7はP4の南の床面直上より出土。9は土師器鉢。口縁を横ナデするが、体部は磨

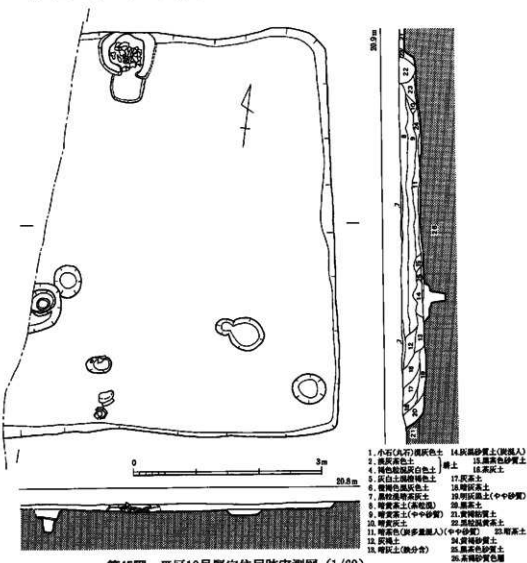


第44図 Ⅲ区9号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

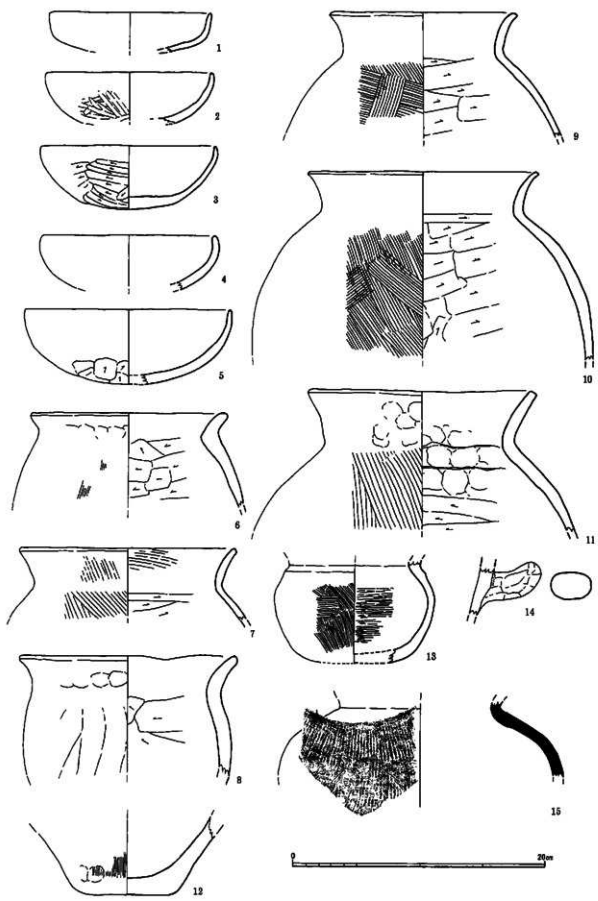
減のため調整は不明。ケズリか。器壁はやや薄く均一に作る。復元口径20.2cm。

10号竪穴住居跡 (図版15-2、第45図)

調査区西端の壁際で検出した。全体の約1/3が調査区外にあり、若干拡張してカマドを検出した。東辺6.4mでほぼ方形になると思われ、Ⅲ区内では最大の規模である。主軸はやや西に振れ、カマドは北壁に付設される。残存する深さは約20cm。床面を精査したが、



第45図 Ⅲ区10号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第46图 Ⅲ区10号窑穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

すぐ下に地山の礫層が現れ、支柱穴はP1しか検出できなかった。張り床はほぼ前面に施される。埋土は自然堆積の様相を呈する。床下は前面礫層の地山となる。

10号竪穴住居跡カマド (図版15-3、第47図)

北壁につくカマドは上面ではプランが不明瞭で、約12cmの高さしか検出できなかった。壁面を若干外に掘り込み、掘りかたを取り囲むように茶灰色土と淡褐色土で構築する。奥壁から30cmに支脚が据えられ、周囲には土器が散乱している。埋土は3層あるが恣意的に埋められたと思われる。内壁は火を受けて赤色・硬化し、床面も同様に硬化する。カマド前面には直径60cmほどの掘り込みを作り、炭・焼土が溜まる。北側には煙道と思われる僅かな段差が見える。

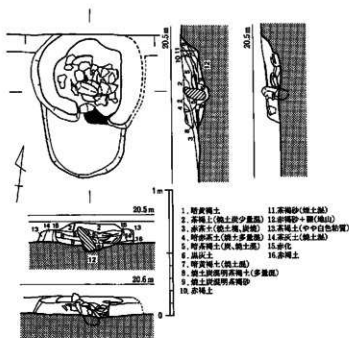
出土土器 (図版23、第46図)

1～5は土師器。4以外は口縁部付近に横ナデし、内底部はナデ、外底部はヘラケズリを施す。4は外底部もナデ。1は体部と底部の境に屈曲を持つもので、器壁も薄い。口縁部付近を横ナデ、底部はナデを施す。2は外底部に放射状のヘラナデ調整を行う。3は細いヘラケズリを行う。5は短い単位でのヘラケズリを行う。4は口縁をやや内湾させる。2はカマド内から出土。6～12は土師器甕で、口縁から胴部中位までの破片資料である。6・8・9は外胴面に縦ハケを、内面に横ヘラケズリを施す。6は口縁部内外面にもハケを施し、その後横ナデする。ヘラケズリの単位は約2cm。7は胴部外面をヘラナデ、内面を横ケズリで調整する。頸部には接合時の指圧痕が残る、その後横ナデする。8は内面のケズリが一定の方向性を持ち、ハケ目もはっきり見える。9は磨滅のためハケはほとんど見えないが、頸部付近に工具のあたりが見える。7は南壁際床面直上からの出土、8・9はカマド内からの出土。10・11は胴部中位までの破片。どちらも胴部外面はハケ、内面はヘラケズリを施す。口縁部は横ナデ。11は口縁部と胴部の粘土接合痕が明瞭に表れ、指圧痕が残る。その後横ナデする。12は外面縦ハケ、内面ナデを施す。外面に指圧痕が残る。10は南壁際の床面直上から出土。13は土師器小型壺の胴部。外面に横ハケ、内面には細かい横ミガキを施す。14は甕の把手で、全面指ナデ整形を行う。15は須恵器甕の肩部の小片資料。外面は平行タタキの後粗いナデ消しを行い、内面はナデ調整する。

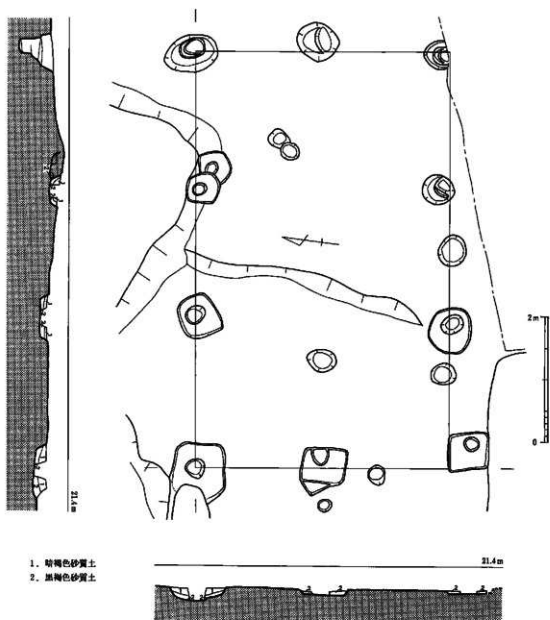
掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (図版16-1、第48図)

調査区中央南端で検出した2間×3間の東西棟である。柱間寸法は梁間・桁間とも7尺(210cm)等間である。柱穴掘りかたは一辺50cm前後の不整形あるいは径60cm前後の円形で、深さは20cm前後にすぎない。土質を判別し難く、一部掘りすぎた所もある。掘りかたの覆土は黒褐色砂質土または暗褐色砂質土である。柱痕は一部で確認でき、径約25cmを測る。遺物は出土していない。



第47図 III区10号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第48図 Ⅲ区1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

2号掘立柱建物跡 (図版16-2、第49図)

調査区中央南側、1号掘立柱建物跡の北側で検出した2間×3間の東西棟で、2間×2間の身舎の西側に庇を付けた建物である。柱間寸法は梁間5尺 (150cm)、桁間は身舎が7尺 (210cm)、庇が6尺 (180cm) を測る。柱穴掘りかたは一边50cm前後の正方形のものが多く、中には不整形のものもある。深さは30cm程度で、覆土は褐色砂質土が中心である。柱痕は径20cmを測る。遺物は出土していない。

土坑

1号土坑 (図版16-3、第50図)

調査区中央で検出した。1号溝、1号掘立柱建物跡と重複関係にあり、当土坑が最も新しい。平面は長軸104cm、短軸62cmを測る楕円形プランで、深さは西側で12cm、東側で15cmを測る。壁の立ち上

がりは比較的急である。

土坑中央では土師器甕が横転した状態で出土した。

#### 出土土器 (図版23、第53図)

1は土師器甕。肩はあまり張らず、頸部が縮まり口縁部が短く外反する。底部は丸底。胴部内面下半は縦ヘラケズリ、上半は横ヘラケズリ、外面は縦ハケ、口縁部は横ナデ。胎土に粗砂を多く含み、暗茶褐色を呈す。口径19.0cm、器高27.7cm。

#### 2号土坑 (図版17-1、第50図)

調査区中央、1号溝の北側で検出した。平面は長軸160cm、短軸75cmを測る楕円形プランで、深さは西側で15cm、中央で20cm、東側で22cmを測る。壁は北西と東にテラスを持ち、立ち上がりは緩やかである。

土坑底面から約10~15cm程浮いた状態で、坏・椀類の完形品が多数出土した。

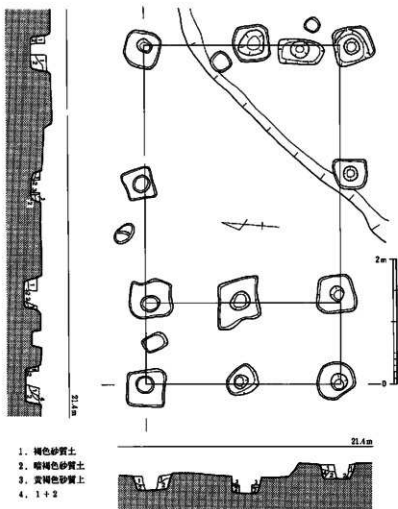
#### 出土土器 (図版23・24、第54・55図)

1~21は土師器坏。平均で口縁径12.0cm、底部径7.4cm、器高3.3cmを測る。体部は内外面ヨコナデ、底部はヘラ切りを行い、板状圧痕が付くものが多い。胎土には赤褐色粒を多く含むものの、概して精良である。22・23は土師器高台付椀で、坏に細い高台を貼り付けたもの。24は黒色土器A類の椀。体部と底部の境は不明瞭である。器表のヘラミガキは磨滅して確認できない。25~31は黒色土器A類の高台付椀。口径6.3~7.8cmと大きさに差があるが、器形はほぼ同様である。外面にロクロの水引き痕がよく残る。内面は横ヘラミガキ調整だが、ほとんど磨滅しており確認し難い。高台は細く長い。

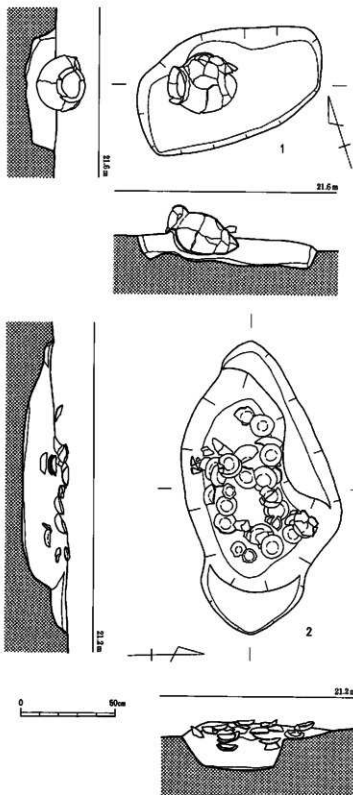
#### 4号土坑 (第51図)

調査区中央の南寄り検出した。5号土坑と重複するが、これより古い。長径1.1m、短径0.4mの楕円形プランで、残存する深さは約30cm。暗茶褐色土の自然堆積である。出土遺物は僅かであった。

#### 出土土器 (第56図)



第49図 Ⅲ区2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第50図 Ⅲ区1・2号土坑実測図 (1/20)

土があり、またテラス最上層からは土師皿が、中央部分中層からはほぼ完形の黒色土器が出土することから土壇墓の可能性が高い。最下層からも坏の底部が出土した。中央最上層（断面図7）は後世の流入であるが、その他は一括埋設かと思われる。テラスは掘削時の階段か。土器以外に特殊遺物は特  
にない。

1は土師器甕。外面を縦ハケ、内面を縦ケズリで調整する。ハケの単位は1.5cm前後。

#### 5号土坑（第51図）

4号土坑を切る。長径2.2m、短径1.5mの楕円形で、底面は不整形な楕円形になる。北側は緩く立ち上り、土器片が張り付くようにして出土した。残存する深さは約30cmで、底面はほぼ水平となる。黒色土の自然堆積である。出土遺物は全体でも僅かな量である。

#### 出土土器（図版24、第56図）

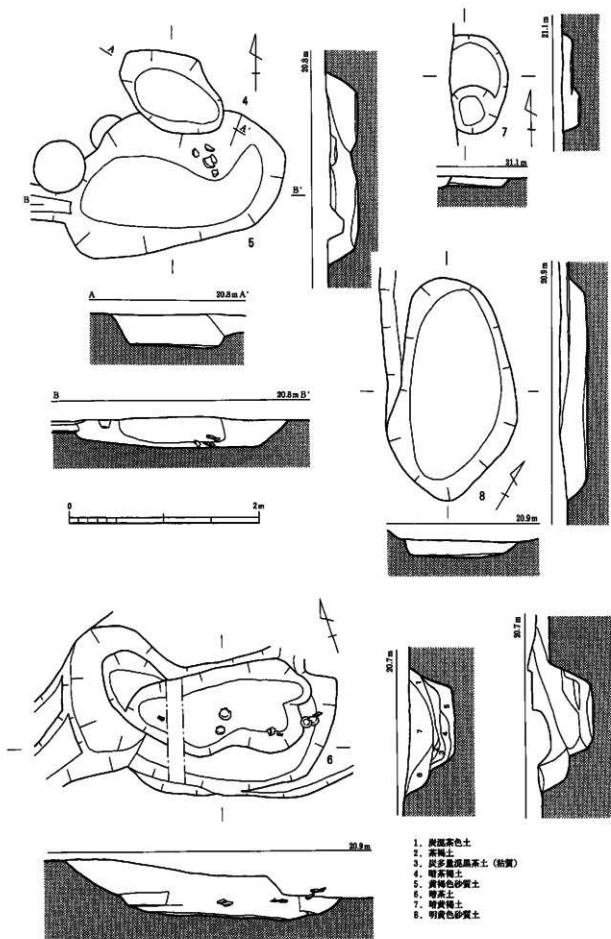
2～7は土師器碗。2～4は口縁部が直立、5～7は内湾する。

2は器壁が薄い。口縁部・体部を横ナデ、底部をナデ調整する。8は土師器高坏で、脚部の一部のみ残存。外面はナデ、内面は縦ヘラケズリを施す。9は土師器甕の口縁部小片であるが、頸部外面付近に縦ハケが僅かに見える。10は体部が直立する須恵器鉢の底部か。外面を工具によるナデ、内面を指ナデで調整する。

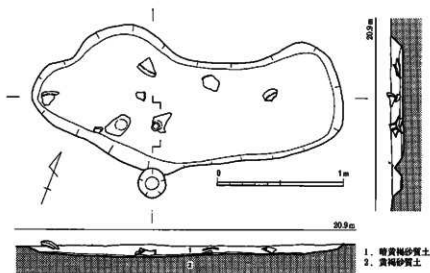
#### 6号土坑（図版17-2、第51図）

調査区中央で検出した。不整形な楕円形で長径3.2m、短径1.4m、主軸を東北東に持つ。深さはもっとも残りの良いところで0.65mを測る。別の土坑に切られるように見えるが、三面を巡るテラス状になる。北側にテラスはなくほぼ直に立ち上がり、最底面はほぼ平坦になる。中位に炭混じりの粘質

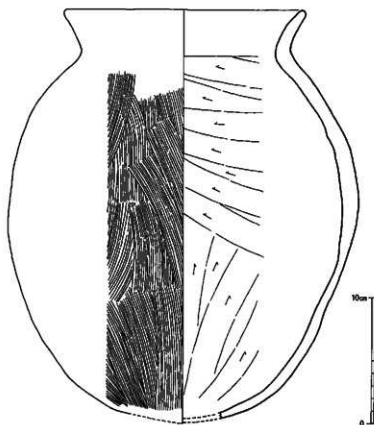




第51图 Ⅲ区4~8号土坑实测图 (1/40)



第52図 Ⅲ区10号土坑実測図 (1/30)

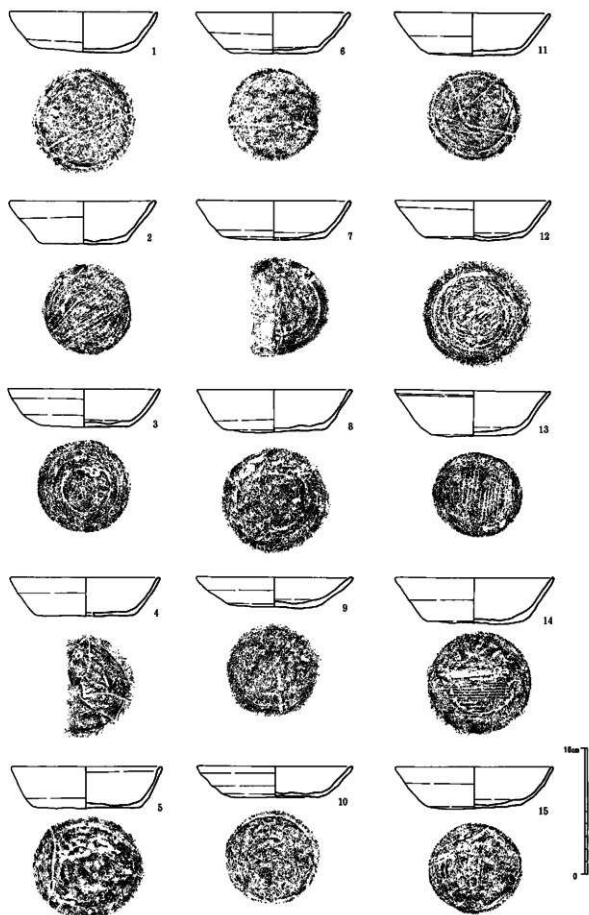


第53図 Ⅲ区1号土坑出土土器実測図 (1/3)

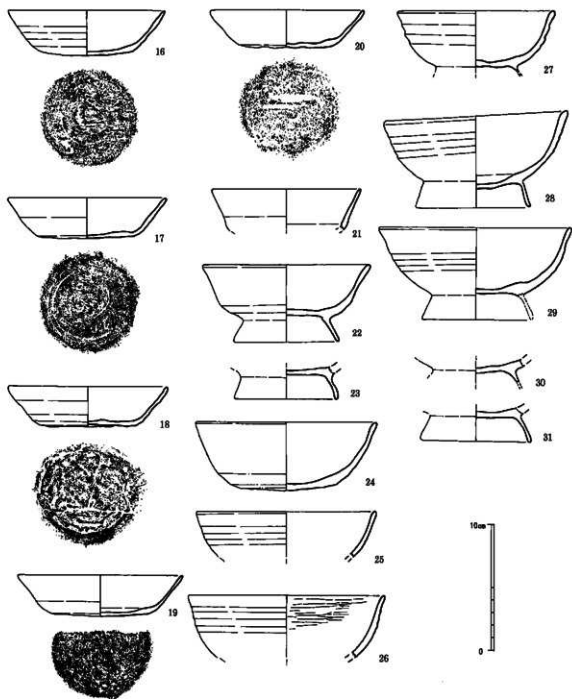
キを施すが磨滅が激しく単位は不明。復元高台径6.6~7.0cm。25は黒色土器B類で体部下位に丸味をもち、高台端部を玉縁状に作るもの。全体横ナデの後ミガキを施すが、磨滅のため単位は明確には確認できない。一部窯しのかからない部分がある。口径15.0cm、器高6.0cm、高台径7.0cmを測る。24は中央部中層からの出土。

出土土器 (図版25、第56図)

11~16は土師器小皿。全て外底部はへら切り未調整。体部は横ナデを施し、内底部は最後にナデ仕上げする。11~13は深めで口径9.2~9.6cm、器高1.3~1.7cm、底径6.6~7.4cm。14~16は浅めで口径9.4~9.6cm、器高1.0~1.3cm、底径5.2~7.0cmを測る。11・15・16は西側テラスの最上層、14は中央部下層からの出土。17~21は土師器杯。外底部へら切り未調整で、17・19は板状圧痕がつく。外底部以外は横ナデし、後内底部は仕上げナデを施す。内底部の凹凸は激しい。口径は13.2~15.2cm、器高3.3~3.9cm、底径8.6~9.6cmを測る。20・21は高台付のもので体部下位に丸味を持ち、口縁端部は外反させる。全体に横ナデを施す。21は復元口径14.8cm、器高5.0cm、復元高台径8.8cm。19は西側テラスの最上層からの出土。22~24は黒色土器A類でいずれも口縁部を欠く。外面は横ナデ調整、内面は横ナデ後ミガ



第54图 Ⅲ区2号土坑出土土器实测图① (1/3)

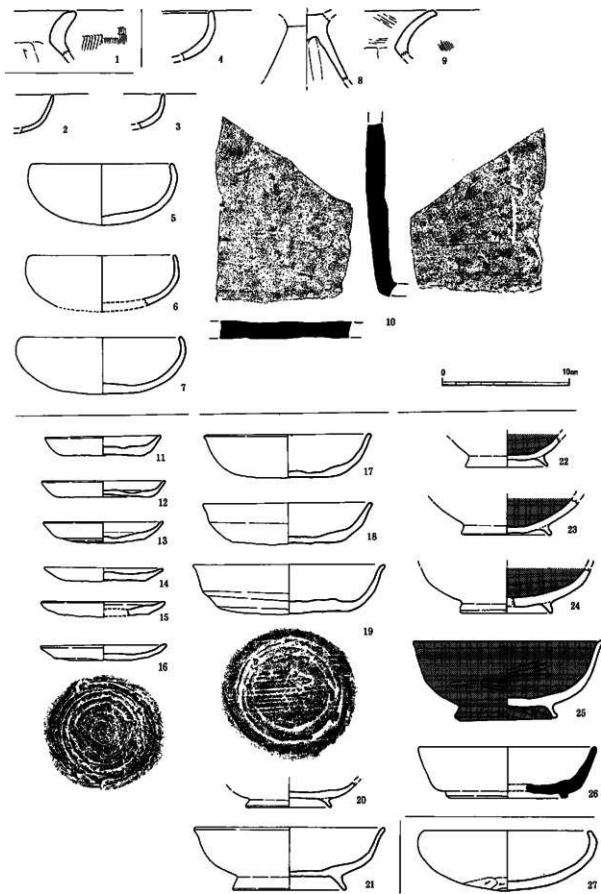


第55図 III区2号土坑出土土器実測図② (1/3)

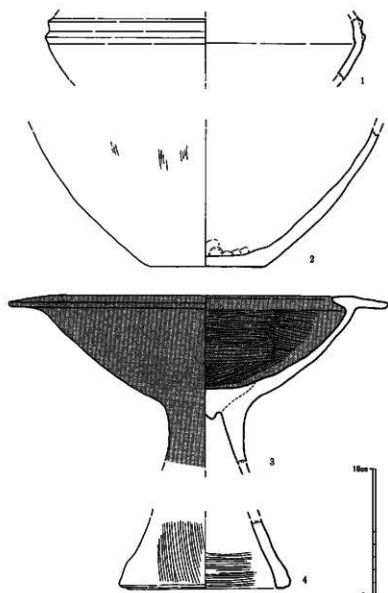
26は須恵器環。埋土最上部から出土したもの。全面を横ナデし、内底部を最後にナデで仕上げる。復元口径14.0cm、器高4.0cm、高台径9.6cm。流入と思われる。

7号土坑 (第51図)

調査区中央で検出した。近代の水路に切られる。長径1.0m、短径0.6m以上の楕円形プランで、主軸を北に持つ。北側はテラスとなり、最上面で土器が出土した。テラスと南側に埋土の変化はなく、自然堆積と思われる。



第56图 Ⅲ区4~7号土坑出土土器实测图 (1/3)



第57図 III区10号土坑出土土器実測図 (1/3)

出土土器 (図版25、第56図)

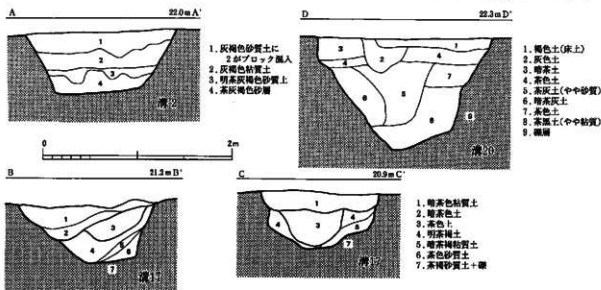
27は土師器碗。1/3程を欠く。内面と口縁部付近は横ナデ、外底部は手持ちヘラケズリを施し、体部中位は一筋横ケズリを施す。口径13.0cm、器高4.7cm。

8号土坑 (第51図)

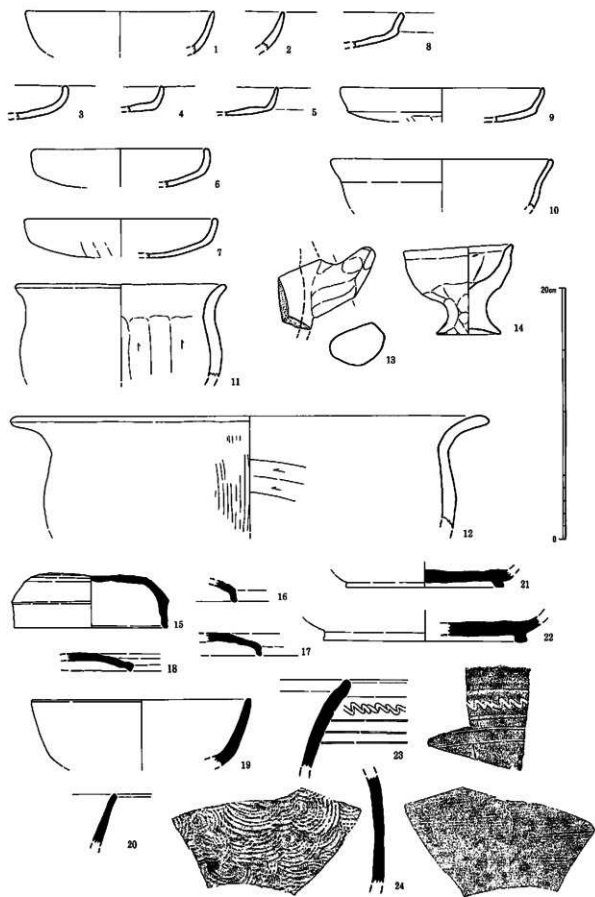
調査区やや西よりの落ち込みの中で検出した。長径2.3m、短径1.2mの楕円形を呈し、残存する深さは20~25cmである。底面は平坦で、黒色土の自然堆積である。出土遺物はない。

10号土坑 (図版17-3、第52図)

8号竪穴住居跡の南側で検出した。長軸2.4m、短軸1.1mの楕円形プランを呈するが、土坑というよりはむしろ溜まり状であり、遺物が流されたような状況である。当初は土器を先に検出し、後にプランを確定した。埋土は周囲の土とほとんど見分けがつかず、



第58図 III区溝断面土層実測図 (1/20)



第59图 Ⅲ区1号溝出土土器实测图(1/3)

一括流入である。

#### 出土土器（図版25、第57図）

全て弥生土器。1は壺胴部小片で、三角突帯を2条貼付する。内外面ともナデ調整。2は壺の胴部下位のみで、内面と外底部はナデ、内底部には指圧痕が残る。3は高環の環部のみで、わずかに外傾する鋤先口縁をなし、口径20.2cm、環深7.3cmを測る。内外面とも丹塗りし、内面は放射状の単位に分割した細かいミガキを、口縁平坦部は放射方向のミガキをそれぞれ施す。外面は横ナデ。4は筒形器台の裾部片。外面はハケ後ナデ消しを行い縦ハケ、内面はナデ調整し、端部近くは横位のハケを施しやや凹状になる。端部はナデる。

#### 溝

##### 1号溝

調査区中央付近で検出した土坑状の溝である。平面形は東西に長い隅丸長方形で、長軸6.0m、短軸1.8mを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。底面は礫層露出面まで掘り込まれており、検出面からは40cmを測る。

#### 出土土器（図版25、第59図）

1・2は土師器環。底部と体部の境が不明瞭で、口縁部が内湾気味に開くもの。3～10は土師器碗。3～9は浅いもので、形状は皿に近い。底部は不安定な丸底で、口縁部が短く内湾するもの（3～7）と、稜をもって屈曲し、口縁部が外反するもの（8・9）がある。端部を内側につまみ出すもの（6～9）もある。10は口縁部がやや外反し、端部を内側につまみ出す。11は小型の土師器甕で、胴部内面縦ヘラケズリ、口縁部は横ナデ。外面は2次加熱を受け器表が剥離する。12は口縁部が長く大きく外反する土師器甕。胴部内面横ヘラケズリ、外面縦ハケ、口縁部は横ナデ。13は甕または甕の把手である。指ナデ・指オサエで整形する。14は小型台付碗。器壁が厚く、雑な作りのもの。指ナデ・指オサエ整形を行い、内面には工具痕が残る。15～18は須恵器蓋。15は屈曲部にやや不明瞭な段を残す。口縁端部には段は認められない。16・17は口縁部を内側に短く折り曲げ、端部を丸くする。18は端部を三角形につまみ出したもの。19～22は須恵器環。19は口縁部が直線的に開くもので、器壁が厚い。焼きが悪く、やや軟質である。20は外反気味に開くもので、器壁は薄い。21・22は低い台形高台が付くもの。23・24は須恵器甕。23は素口縁で、口縁部下に3条の沈線文と1条の太い波状文を描く。24は内面に同心円当て具痕、外面に細い平行タタキを行う。

##### 2号溝（第58図）

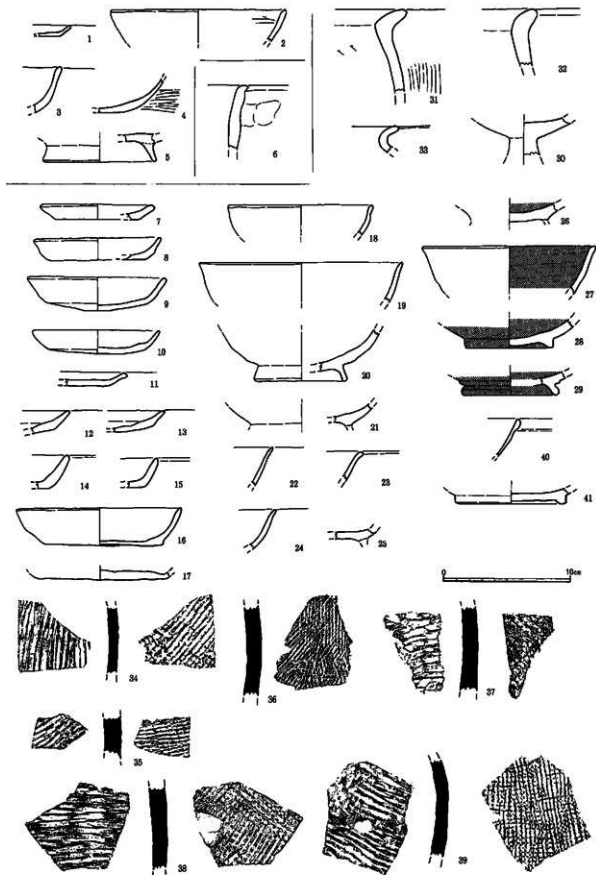
調査区中央から東側にかけて検出した、クランク状に曲がる溝である。調査区中央を縦断するように、真北から33°東に振れて直線的に伸びる南北溝、これから真東に屈曲して30m程直進する東西溝、さらに屈曲して真北から28°東に振れる南北溝からなる。調査区外へ伸展するため確認できなかったが、17号溝に接続する可能性もある。溝は断面台形に掘削され、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は灰褐色砂質土が主に堆積する。遺物はほとんど出土せず、図示できるものはない。

##### 6号溝

南北方向に走る小溝である。長さ28mを検出したが南北は調査区外に延びる。幅80cm、深さ10cm。断面逆台形になる埋土は上層が灰色の耕作土、下層は砂層になる。最近まで水田の畦があったことから、近代の水田に伴うものと思われ、溝群の中で最も新しい。下層から混入と思われる土師器が出土。  
出土土器（第60図）

1は土師器皿で、小片のため口径復元不可。底部ヘラ切りで、内外面ともナデ調整。2～4は土師





第60图 Ⅲ区6~8号滑出土土器·磁器夹测图(1/3)

器坏。2は内面にコテ当て痕があり、一部磨きも見える。外面は横ナデ調整。復元口径10.6cm。3は外面口縁部はナデによりやや外反させる。底部付近には磨きがかすかに見られる。4は内外面に磨きが見られる。2・4大宰府系か。5は土師器高台付皿の高台部片。内外面横ナデ調整。復元高台径8.8cm。

#### 7号溝

南側で検出した南北小溝である。埋土は黄色土で、最も残りの良い南側で幅80cm、深さ約15cm、調査区中央で削平のため消滅するが長さ14mを検出、南は調査区外に延びる。出土遺物は少ない。

#### 出土土器（第60図）

6は土師器甕。内外面口縁部はナデ調整、体部内面はケズリ。外面に一部押圧痕とハケ目が残る。

#### 8号溝

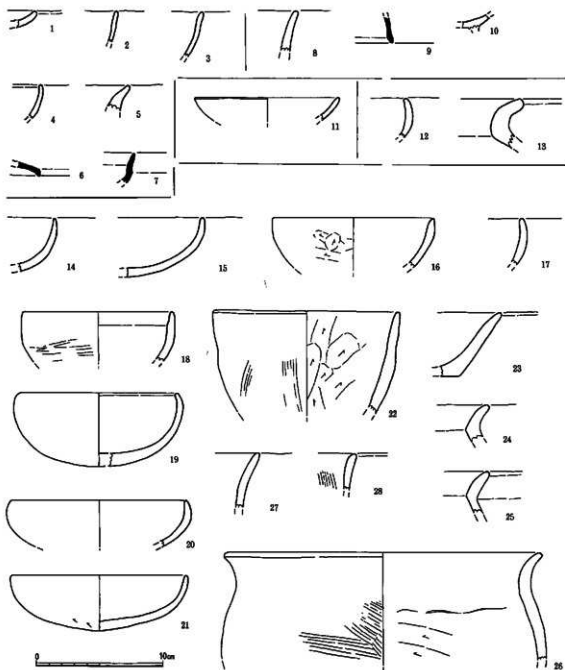
調査区中央から西に延びる溝で、6号土坑と重複するがこれより新しい。トレンチ等によって分断されるため解りづらいが、2号溝と関連するものか。残存する深さは15cm程度で、底部は平坦になり壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黄色土の自然堆積である。25mを検出したが西側は調査区外に延びる。

#### 出土土器（図版25、第60図）

7～13は土師器小皿。9以外はヘラ切り未調整、9はヘラ切りの後ナデを行う。また9は底部に丸みを持たせるが、その他はほぼ平坦。7・8は磨滅が激しい。12は口縁端部を平坦に作り、体部がやや屈曲する。14は口縁につまみ出しによる段を有する薄手のもので、焼成も極めて良好、胎土も密である。ナデも丁寧に施す。12～14は板状圧痕を有する。復元口径6.6～8.0。11は大宰府系と思われる。14～17は土師器坏。いずれもヘラ切りで、体部内外面ナデ、内底部は横ナデ調整を施す。17はヘラ切り時のゆがみにより、体部と底部の境に不整形の段を有する。復元口径9.5cmを測る。17は板状圧痕を有し、やや古い様相を持つ。18～25は土師器碗。すべて内外面ともナデ調整。22はやや薄めに作られる。18は小型碗。20は高台がやや内よりにつく。23は口縁の屈曲が大きくなるものである。復元口径は18・19が11.2・15.8cm、20の復元高台径が7.0cmを測る。ほかは小片のため復元不可。26・27は黒色土器A類でどちらも風化のため磨きは確認できない。外面はナデ調整で胎土は淡褐色。27は体部にやや丸みを持つ。復元口径12.4cm。28・29は黒色土器B類で28はやや丸みのある高台を貼付する。内面はヘラミガキが単位は見えない。29は高台に細かい面取りが入り、高台張り付けのための段が体部外面にできる。外面は丁寧なナデ調整を施す。30は土師器高坏。全面磨滅のため調整は不明瞭だが、外面脚取り付き部に工具の当たりが見える。ほかはナデ調整か。31・32は土師器甕。31は内面磨滅のため調整不明。外面は粗いハケ目残り、口縁・頸部付近はナデ調整。32は体部内面縦ケズリその他はナデ調整を施す。33は内外面ナデ調整。胎土は精良で、焼成も極めて良好である。34～39は須恵器甕。体部小片資料ばかりで、全容は知り得ない。平行・格子の2種類のタキキがあるが、当て具は同類のものになる。すべて硬質で焼成は良好。40は白磁碗Ⅱ類の口縁部。内外面にやや鈍い白色の釉を施す。胎土はやや粗。41は青白磁。外底部は露胎になり、他は青白色の釉をかける。高台外面は釉のかけ様が雑になる。

#### 9号溝

6号溝と平行して検出した小溝。幅は20～30cmで、深さは10cm前後と残りが悪い。北側は自然流路によって削平されるため延長は不明、19mを検出。6号溝より古い。埋土は黄褐色土の自然堆積で、僅かに土器を含む。



第61図 III区9～14号溝出土土器実測図 (1/3)

出土土器 (第61図)

1は土師器小皿。内外面ともナデ調整。小片のため口径復元不可。2～4は土師器碗で、小片のため口径復元不可。内外面ナデ調整。4は内面口縁部に一筋ミガキによる凹線が入る。5は土師器甕の小片で、ナデ調整以外は不明。6は須恵器蓋で、小片のうえ磨耗が激しく僅かにナデが見えるのみである。7は須恵器坏。小片であり口径は不明。薄手のシャープな作りである。

11号溝

北側で検出した溝で、北側は調査区外に延びる。このためはっきりとは確認できないが、2号溝に続く溝の上層埋土の可能性もある。幅約40cmで深さは8cm程度しかなく、南側は削平により消滅して

いる。16mを検出。埋土は黄褐色土の自然堆積である。

#### 出土土器（第61図）

8は甕口縁。摩滅の為調整不明。9は須恵器蓋で、小片のため口径復元は不可。全体を回転ナデ調整する。調整・胎土は良好。10は土師器高台付碗の底部のみの資料。磨滅のため調整は不明。

#### 12号溝

調査区東端で検出した。削平が激しいため残りが悪く、南北9mしか確認できなかった。残りの良いところで幅70cm、深さは10cm程度で埋土は黄色土。近辺に平行若しくは直交する溝らしきものがあることから、水田関連の可能性がある。

#### 出土土器（第61図）

11は土師器小皿で、内外面ナデ調整。復元口径は11.5cm。

#### 13号溝

5・6号住居を挟んで12号溝の西側で検出した。削平のため6.5mのみ検出。残りの良い部分で幅50cm、深さ10cm程度。埋土は黄色土で、性格は12号溝と同様と思われる。

#### 出土土器（第61図）

12は土師器碗。明赤褐色を呈し、内面に僅かに磨きが見える。外面は調整不明。13は土師器甕。体部内面はケズリ、その他はナデを施す。

#### 14号溝

調査区西側で検出した。削平のため8mのみの検出。埋土は黒色で一括堆積と思われる。

#### 出土土器（図版25、第61図）

14～21は土師器碗で、全て磨滅が激しい。14は外面ヘラナデ、内面横ナデ。15・17は内外面とも横ナデ。16は口縁部と内面は横ナデし、外面はケズリを施す。口縁部内外面に甘い稜がつく。18は外面を横ハケした後ナデを行う。他はナデ調整で、口縁部内面に横ナデによる稜がつく。19は全面ナデだが、外底部にかすかにケズリが見られる。20はミガキのようであるが磨滅のため不明瞭。21は外底部をケズリ他は横ナデ。22は土師器鉢で、口縁部は磨滅のため原形をとどめない。内外面ともナデが見られる。23は土師器坏で、体部が直線的に伸びる。内外面ナデ調整。24～26は土師器甕。26は外面をハケ調整、内面は横ケズリするが、粘土接合痕が明瞭に残る。24・25は小片で、内面のケズリと外面のハケが僅かに観察できる。27・28は土師器甕。27は器壁の薄い小型のもの。内面は前面縦ケズリで外面は口縁部をナデ、体部をハケ調整する。復元口径14.6cm。28も薄手のもので、内外面のハケ目が見える。

#### 15号溝

14号溝の西側で、6mを検出。埋土は黒色で残りが悪く遺物の出土はない。

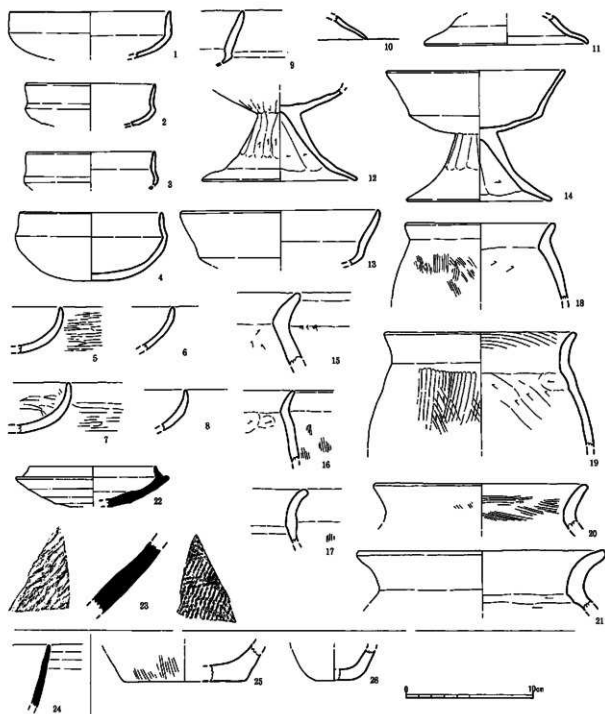
#### 16号溝

14・15号溝の西側で検出。蛇行しており南北は削平される。埋土は黄褐色で出土遺物はない。

#### 17号溝（第58図）

調査区西側で検出した。総延長46mを検出したが両端は調査区外に延びる。幅60cm深さ30cm。地山の礫層に掘り込み、断面逆台形状になる。途中でほぼ直角に曲がり、西側に抜ける。礫の多い部分を避けたようにも見える。埋土は上層が自然堆積、下層は粘質土と砂質土の互層で流れた跡がある。周囲の住居と関連するものか。

#### 出土土器（図版26、第62図）



第62図 III区17～19号溝出土土器実測図 (1/3)

1～8は土師器碗。1は磨滅が激しい。外底部にミガキを施すが不明瞭。その他は横ナデ調整。2は口縁部と体部内面を横ナデ、外底部はヘラケズりする。3は残存部はナデ調整。4は磨滅が激しく調整は不明。5・7は内外面丁寧なミガキ。6は外底部がケズリ、8は横ナデ調整。9～14は土師器高環。9は坏部小片で全面横ナデ。10・11は脚部のみの小片で全面横ナデ。12は坏内底部と脚裾部をナデ、外面はヘラケズリによる面取りを行う。脚内面上位は粗い面取りをし、端部付近は横ケズリ。13は残存部全面横ナデ。14は坏部を全面横ナデし、内底はナデ仕上げをする。脚部は上位をヘラケズ

リによる面取りをし、端部付近は横ナデする。15～21は土師器壺。15～17は口縁部小片で、外面をハケ、内面をケズリで調整する。18は口縁部内面も横ハケで調整する。内面ケズリは頸部付近は横、胴部は縦方向になる。19は磨減が激しくハケ目・ケズリとも僅かにしか見えない。口縁部は工具による横ナデ。20は口縁部内面にケズリを施す。21の内面にはケズリ工具のあたりが見える。22は須恵器坏。体部中位まで回転ヘラケズリを施し、その他は回転ナデ。内底部は仕上げナデを施す。23は須恵器壺で、小片のため傾きは不明。外面平行タタキ、内面同心円当て具痕。

#### 18号溝

調査区西側で検出。北西-南東溝で、幅約50cm、深さは残りの良い箇所でも20cmほど。24mを検出したが両端は削平により途中で消滅する。埋土は灰色と黄褐色の自然堆積。出土遺物はほとんどない。出土土器（第62図）

24は須恵器坏口縁部のみ的小片。全面回転ナデを施す。口縁部外面に僅かに線痕がつく。

#### 19号溝

調査区西側南端で18号溝と重複して検出するが、これより古い。残りが悪く南側で深さ約20cmあるが北側は浅くなり消滅する。5mを検出。埋土は黄褐色土。遺物は少なく、図化できた弥生土器は混入と思われる。

#### 出土土器（第62図）

25は弥生土器壺の底部のみ的小片。外面をハケ、内面と外底部をナデで調整する。26はミニチュア土器で口縁を欠く。全面指ナデ調整する。

#### 20号溝（第58図）

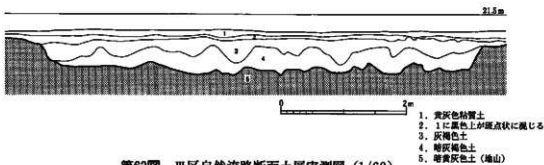
調査区西側で、17号溝と平行して検出した。しかし17号のように屈曲せず、途中で地山の礫層の中に消える。13mを検出。南側は調査区外に延びる。断面はU字状になるが、消滅部分に近くなると緩やかな半円形になる。幅90cm、南側では深さ60cmであるが北に向かって浅くなる。埋土上層は自然堆積だが、中層で一度掘り直しが見られる。遺物は小片が少量で、図化できなかった。

#### 21号溝

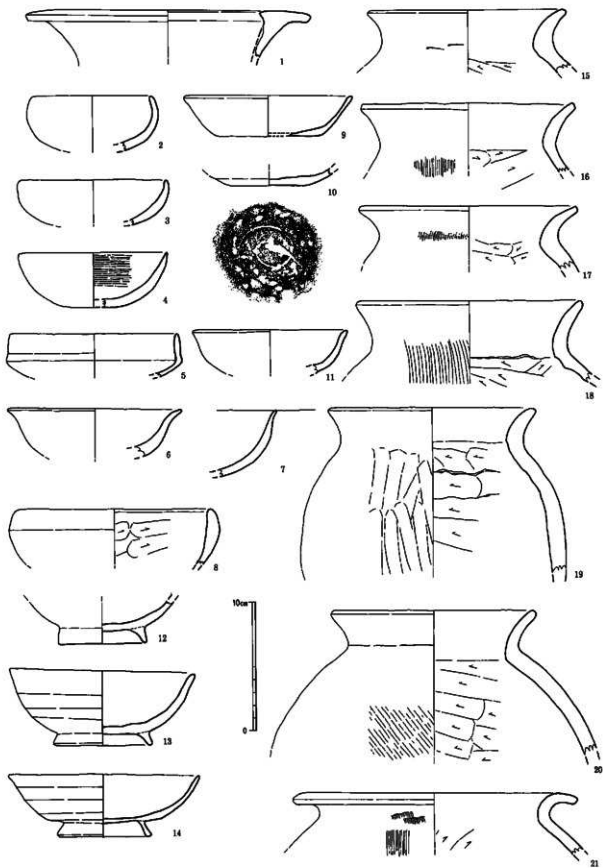
3・4号住居跡の南側で検出した北西・南東溝。残りが悪く深さ約10cmで北西側は消滅する。出土遺物はない。

#### 自然流路（第63図）

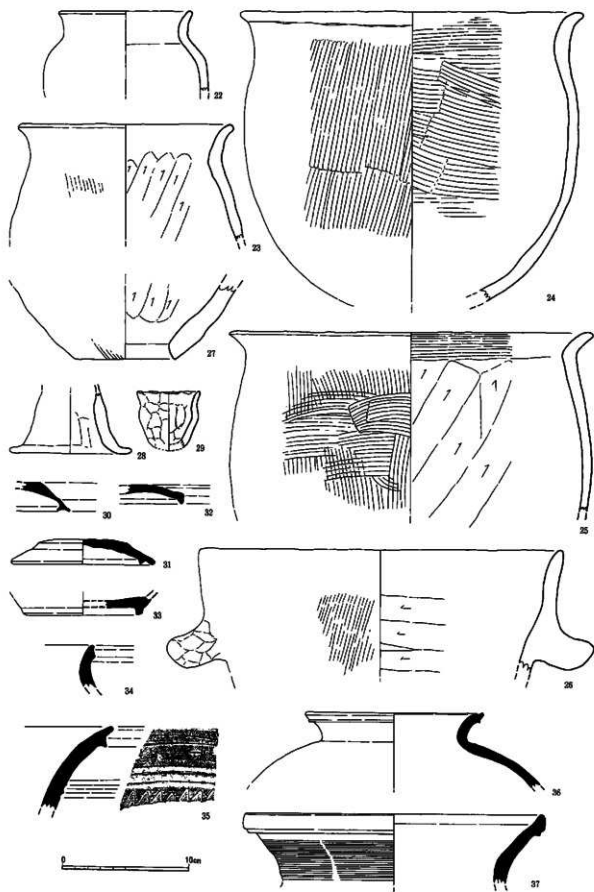
調査区中央で検出した。形状から自然流路としたが、本来は旧地形の窪地に形成された包含層のようなものであろう。長さ39m、幅9mを測る。深さは最も深い所で80cmを測る。土層断面の観察によると、底面はかなりの凸凹が認められ、部分的に下層の礫層が露出する所もある。覆土は自然堆積の状況を呈しており、覆土内からは多くの遺物が出土した。



第63図 III区自然流路断面土層実測図（1/60）



第64图 Ⅲ区自然流路出土土器实测图① (1/3)



第65图 III区自然流路出土土器实测图② (1/3)

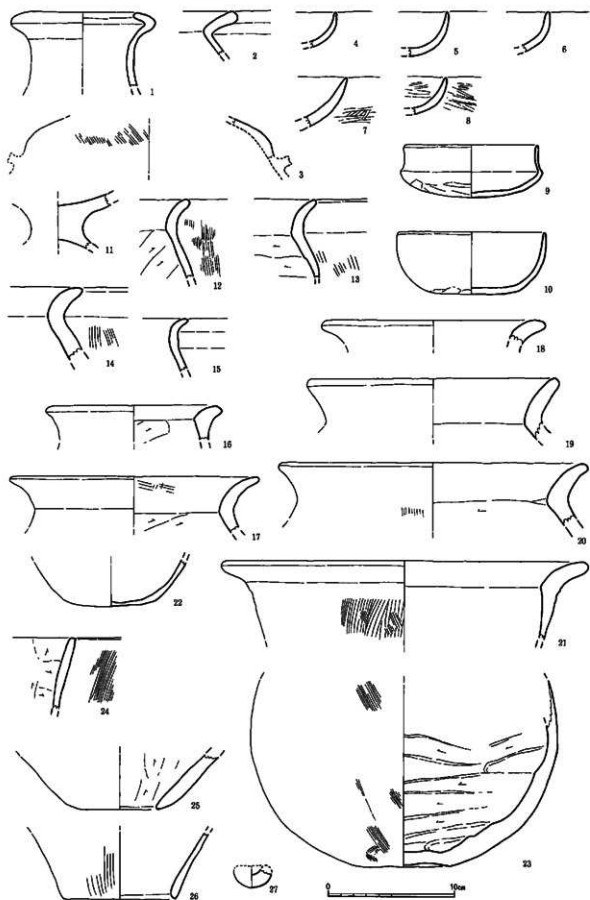


### 出土土器（図版26、第64・65図）

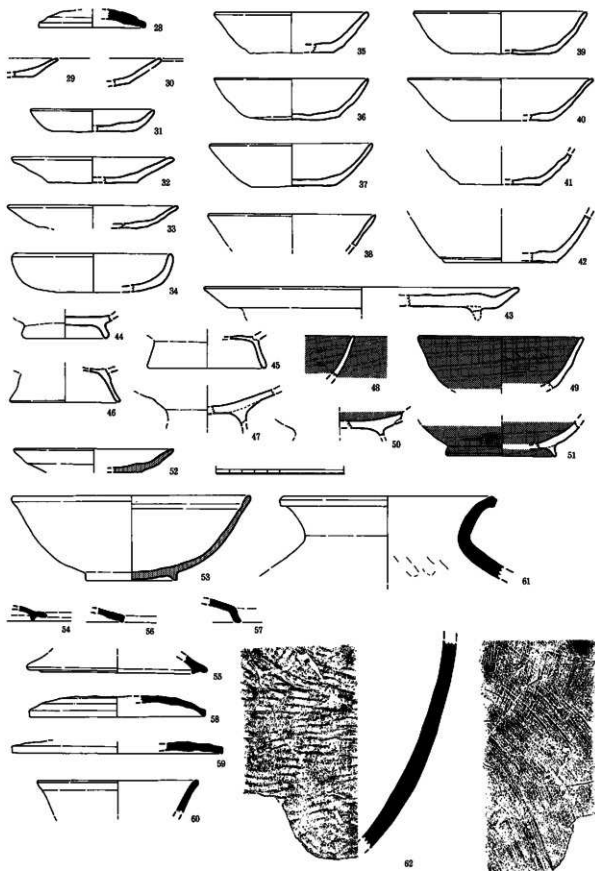
1は弥生土器壺の口縁部で、胴部は短くやや外傾する。2～8は土師器碗。2は口縁部が内湾する。3は内湾して端部が直立する。4は内面横ハケ調整を行う。5は模倣環。屈曲部は不明瞭で、口縁部は直立する。6・7は口縁部が緩やかに外反する。高環か。8は器壁が厚く、口縁部は直立する。内面横ヘラケズリを行う。9～11は土師器杯。9は口径13.4cm、底径8.4cm。底部はヘラ切り。10は底部ヘラ切り。11は口径12.0cm。12～14は高台付碗。12は断面三角形に近い高台。高台径7.0cm。13は口径14.6cm。高台径7.8cm。14は器壁が薄い。口径15.0cm、高台径7.4cm。15～25は土師器甕。いずれも口縁部が強く外反する。19は胴部内面横ヘラケズリ、外面縦ヘラナデ。21は口縁部の外反が強く、水平近くまでになる。22は小型のもので、胴部内外面ナデ。24・25は頸部が締まらず、胴部が半球形に近い。24は胴部内面横ハケ、口縁部内面横ハケ後横ナデを行う。25は胴部外面縦ハケ後横ハケ、口縁部内面横ハケ後横ナデを行う。26・27は土師器甕。26は口縁部がまっすぐに立ち上がるもので、端部は丸い。胴部内面横ヘラケズリ、外面縦ハケ、口縁部外面横ナデ調整を行う。27は26と同一個体で、一孔式。孔径7.0cm。28は土師器高環。柱部は太く、裾部は短く外側に折り返される。裾径9.8cm。29はミニチュアの甕。全面指ナデ・指オサエで整形する。口径5.0cm。30～32は須恵器甕。30・31はかえりが口縁部の内側におさまる。32は端部を下方に短くつまみ出し、断面三角形にする。33は須恵器杯。高台は低く、内側で接地する。34～37は須恵器甕。34～36は口縁部下に断面三角形の安帯を持つ。35はさらにその下に櫛掻き波状文を巡らす。37は口縁部を玉縁状にする。口縁部下にはカキ目を施す。

### Ⅲ区ビット出土土器（図版26、第66・67図）

1は弥生土器袋状口縁部の破片で、稜は付かない。磨滅のため調整は不明瞭。僅かにナデが見える。2は薄手の弥生土器壺の口縁小片。内外面を横ナデする。3は小片であるが、瓢形土器か。外面はハケ目後粗くナデを行い、丹塗りを施す。内面は剥離のため調整不明。4～10は土師器碗。4～6は口縁部が直立するもので、風化のため調整不明。7・8は内外面にミガキを施す。9は模倣環で、外底部を手持ちヘラケズリ、他を横ナデする。淡褐色で精緻な焼きである。11は土師器高環の環脚接合部の小片で、風化のため調整不明。12～23は土師器甕。12～21は口縁部片。口縁部は横ナデ、体部外面を縦ハケ、内面をケズリで調整する。22・23は底部片。22は小型で薄手のもので、内外面ともナデを施す。23は球形胴のもので、外面はハケ調整の後部分的に粗いナデやケズリを施す。全体に凹凸が激しい。内面は強いケズリを施す。底部は窪ませてやや上げ底気味になる。24～26は土師器甕。24・25は同一個体と思われる。20は外面を縦ハケ、内面をケズリで調整する。口縁部は平坦に作り僅かに外に引き出す。21は外面ナデ、内面をケズリで調整する。22は外面を粗い縦ハケ、内面をケズリで調整し、端部は横ナデして稜を作る。端部5～10mmは炭が付着する。27は碗形のミニチュア土器で、口縁部を欠損する。器表がかなり風化している。28は小型の土師器壺で、内外面横ナデ調整。端部付近は強いナデで端部を玉状に作り出す。29～33は土師器小皿で、全て体部は横ナデ、外底部はヘラ切り未調整である。31は板状圧痕がつく。31～33は復元口径9.6・12.6・13.0cm、器高1.8・2.0・1.8cm、底径6.2・7.0・8.6cm。31は大宰府系か。34～42は土師器杯。34は口縁部が直立する杯で、全面横ナデする。35～41は外底部ヘラ切り未調整で、36は板状圧痕がつく。体部は横ナデで、内底部はナデで仕上げる。38は碗の可能性もある。42は体部横ナデ、外底部を回転ケズリする。体部と底部の境に二条の凹線がつき、退化した高台のようになる。復元口径は11.8・12.2・12.6・13.2・13.4・14.6cm、器高3.2・3.4・3.4・3.3・3.4cm、復元底径6.4・7.4・6.4・8.0・7.8・6.5・8.8cmとなる。39・40は大宰府系か。43は高台付の土師器皿で、高台の形は不明。内面と体部外面を横ナデ、外

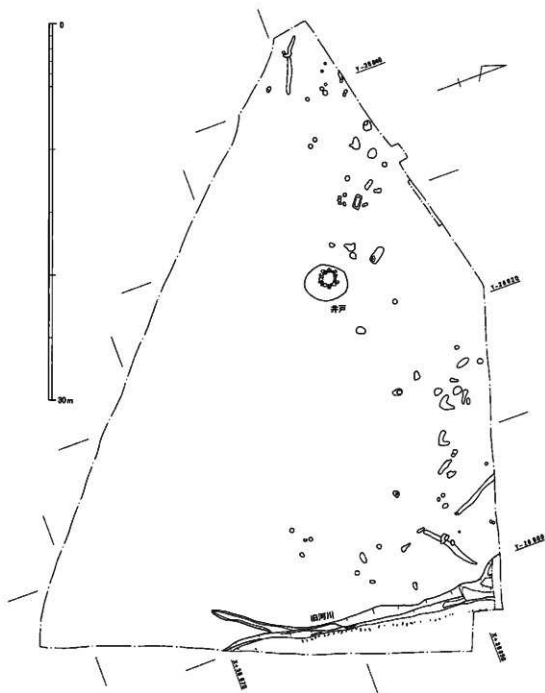


第66図 III区ビット出土土器実測図① (1/3)



第67図 Ⅲ区ピット出土土器実測図② (1/3)

底部は回転ケズリで調整する。復元口径24.4cm。44~47は土師器碗。いずれも底部と高台部のみの小片。44は高台が低く太く端部を丸く納める。45・46はやや高い高台に薄い腕部がつくもの。47は高台をやや中央よりに貼付する。全て横ナデ。48~50は黒色土器A類で、外面横ナデ内面にミガキを施す。49には内面にコテ当て痕が見られる。復元口径12.8cm。51は黒色土器B類で、内外面にミガキを施し外底部はナデる。いずれも磨滅のためミガキの単位は明瞭でない。52は瓦器皿。磨滅が激しく調整は不明瞭。体部は横ナデか。復元口径12.4cm、器高1.9cm復元底径7.6cm。53は瓦器碗。磨滅が激しいが、全面ナデか。ケズリは見られない。内面口縁部付近に凹線を一条巡らせる。復元口径18.6cm、器高



第68図 IV区遺構配置図 (1/300)

7.0cm、復元高台径6.7cm。54～59は須恵器蓋。54・55は返りを有するもので、残存部は回転ナデ。57・59は断面三角形の端部は稜があまり明瞭でない。全面に回転ナデを施し、天井部内面は横ナデで仕上げられる。51は復元径12.0cm、53は復元径13.6cm。60は須恵器環口縁部の小片で、回転ナデを施す。復元口径12.8cm。61は生焼けの須恵器甕で磨滅が激しい。口縁部付近を回転ナデし、外面には平行タタキが、内面には接合時の指圧痕が残る。口縁端部には凹線が巡る。62は須恵器甕で、内面には平行当て具痕が残るが、外面はハケ工具による擦過が丁寧に施され、タタキは見えない。

## 6 IV区の調査

IV区は船越二ノ上遺跡の西端に位置し、調査以前は水田として利用されていた所である。調査は平成6年度に実施した。試掘調査の結果、西側では遺構が確認されなかったため、東側のみ調査を行った。調査面積は約1260㎡。

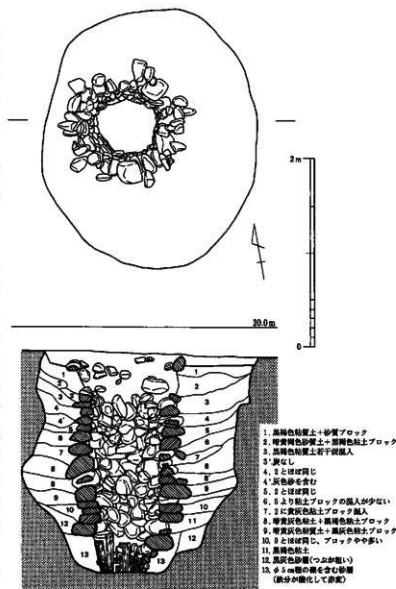
遺構検出面の標高は北側で19.2m、南側で18.3m、西側で18.7mを測り、北側がもっとも高く、北と南では90cm程の比高差がある。遺構は北から北西にかけての高い場所では確認されていない。遺構の遺存状態から判断しても、水田造成時にかなり削平されたようである。

検出した主な遺構は、井戸1基、旧河川1条、ピット等で、全体的に遺構は稀薄である。

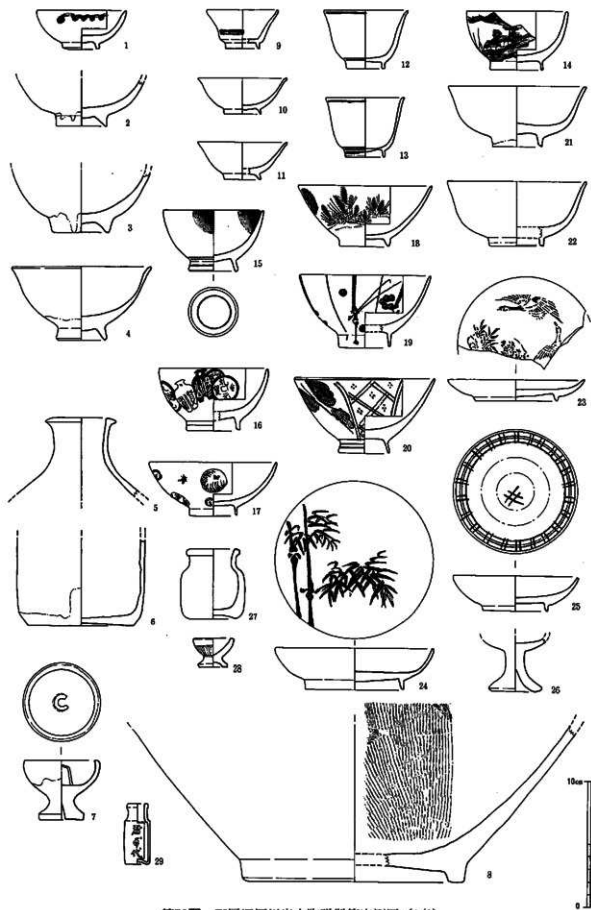
井戸 (図版19-1・2、第69図)

調査区のほぼ中央で検出した石組みの井戸である。掘形の平面形は長軸275cm、短軸220cmの不整形円形である。井戸底までの深さは235cmを測り、砂層を完全に掘り抜き礫層に達し、さらに礫層を約30cm程掘り込んでいる。井戸本体は掘形の中心から北西にややずれて構築され、平面形は径60cmの不整形円形プランである。井戸基底部には底板を抜いた木桶を設置し、その上部から人頭大の円礫を小口積みに積み上げる。円礫を一段積み上げる毎に丁寧に裏込めを行う。

遺物は井戸覆土および裏込め土から若干出土している。



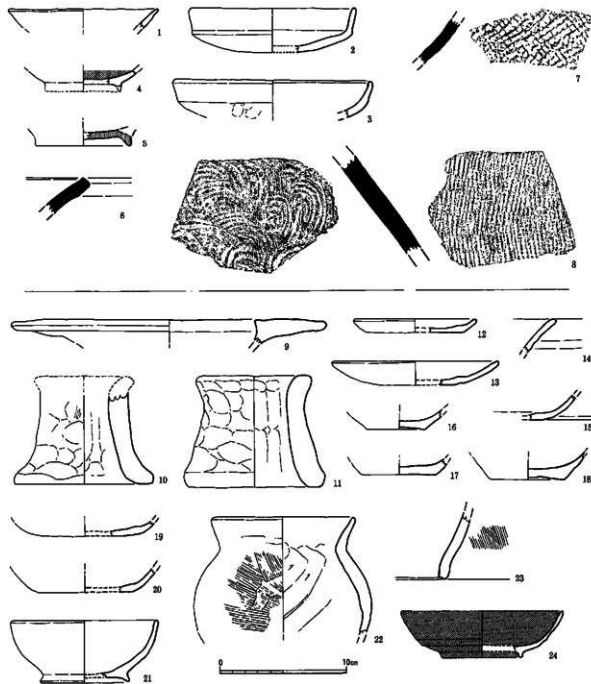
第69図 IV区井戸実測図 (1/40)



第70图 IV区旧河川出土陶磁器等实测图 (1/3)

出土土器 (第71図)

1は井戸覆土から出土の土師器碗。口径11.8cm。2・3は土師器坏で、どちらも井戸裏込め土内出土。2は須恵器模倣坏で口縁部が外に開く。3は屈曲が不明瞭な浅い坏。4は黒色土器A類の碗で、井戸覆土出土。内面ヘラミガキ、外面ナデか。5は瓦器碗で、井戸覆土出土。底部に断面三角形の高台を付す。6は須恵器鉢で、井戸裏込め土内出土。口縁部が断面三角形のもの。内外面ナデ。7・8は須恵器甕。7は井戸裏込め土内出土。内面平行当てて具、外面格子タタキ。胎土は精良である。8は井戸覆土出土。内面同心円当てて具、外面格子タタキ。



第71図 IV区出土土器実測図 (1/3)

旧河川（図版19-3）

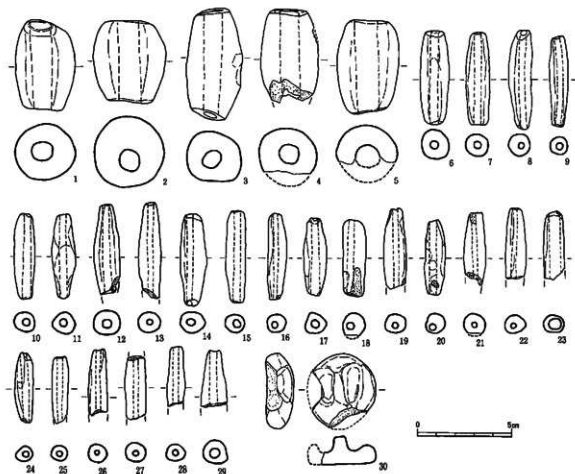
調査区北側で検出した。全長22m、深さは北側で130cm、南側で100cmを測る。底部では旧河川の方向に沿って1列の杭列を検出した。杭には長さ60~80cm、径5cm程度の丸材を使用している。地元の方に伺った話では、昭和10年代に水田を造営する際、重機でこの旧河川を埋めたということである。

覆土からは陶磁器、ガラス瓶、鉄器等が出土している。

出土陶磁器等（図版27、第70図）

1は陶器小碗。全体に白色釉を掛け、鉄絵を描く。高台壘付は露胎となる。2~4は陶器碗で、いずれもほぼ同形である。内外面褐釉を塗布するが、高台付近は露胎となる。内面見込みに3ヶ所の目跡が残る。5・6は陶器壺で、接合しないが同一個体である。口縁部外側をつまみ出して断面三角形にし、頸部は直立する。肩部は張らない。胴部下半は直立し、底部は糸切りを行い平坦である。内外面褐釉を塗布するが、外面底部付近は露胎となる。

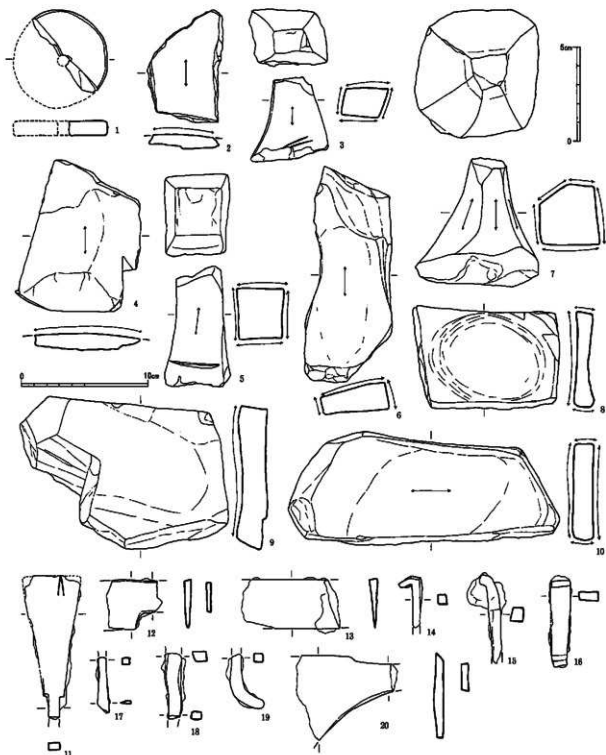
7は陶器灯明台。底部以外は全面褐釉を塗布する。底部は糸切り。内面中央に灯芯を支える円柱がある。8は陶器播目鉢。播目は大きく、密に入れられる。外面は回転ヘラケズリを行い、内外面に褐釉を塗布する。高台壘付およびその内部は露胎となる。9~13は磁器猪口。いずれも高台壘付は露胎となる。9は体部外面に幅の広い圏線を1条巡らす。10・11は無文。12は口縁部に1条、高台上部に1条の圏線を巡らす。13は口縁部に1条、高台上部に2条の圏線を巡らす。14~16は磁器小碗。14は体



第72図 土製品実測図（1/2）



部外面に黒線・青塗りの風景絵を描く。15は内面3ヶ所に半円の牡丹文を入れる。16は茶色・緑色の顔料を使用し、外面に古銭・徳利をスタンプする。文様からして、祝賀用の器であろう。ちなみに、乾元重宝は10世紀前半、大観通宝は12世紀前半鑄造のものである。17~22は磁器碗。17は朱・青色塗料で円文・毛文・蝶をスタンプする。18は赤・青色塗料で松葉・夕日をスタンプする。19の外面は、ややデフォルメされた木の枝・実を青色塗料で筆書きする。20は2条の細線および4つの点からなる



第73図 石製品・鉄製品実測図 (8~10:1/3、他は1/2)

菱形文を3ヶ所に配し、間に木葉文を描く。21・22はほぼ同形で無文のもの。壺付は露胎。23～25は磁器皿。23は青白色釉の上に鶴・雁・草花をスタンプする。高台は露胎。24は内面に青色塗料で竹を筆書きする。25は内面口縁部付近に4条の圓線および2条1単位の直線を巡らす。内面見込みには菱形文を入れる。見込みの釉をかき取り、壺付は露胎となる。26は磁器台付小碗。外面に濃青色の釉を塗布する。一般的に仏具として使用されるものである。27～29はガラス製品。27は乳白色で、通常化粧瓶として使用される。28はやや青味があった透明色を呈し、気泡が多い。29は口縁部は断面円形、体部は断面四角形となる。化粧瓶として使用されたものだろう。体部には「君が代」と隔刺されるが、商品名か。

#### 包含層等出土土器（図版26、第71図）

灰褐色土および同質で色調の異なる黒褐色土から出土したものである。

9は弥生土器壺。鈎部が水平に長く伸びる。内側はわずかにつまみ出す。10・11はほぼ同形の支脚。器高9cm前後で、器壁が非常に厚い。全面指ナデ・指オサエ調整を行う。10には一部ハケ目が認められる。12は土師器小皿。底部はヘラ切り。口径9.8cm、底径7.6cm。13は土師器皿。底部はヘラ切り。口径13.2cm、器高1.9cm。14～20は土師器坏。14は口縁部が直線的に開く。15は底部ヘラ切り。16～18の底部はヘラ切りか。胎土は悪い。17・18は板状圧痕を有す。19・20は底部ヘラ切り。21は土師器碗。断面三角形の低い高台を付す。胎土は精良。口径11.8cm、底径6.8cm。22は球形胴の土師器甕で、口径11.2cm。内面縦ヘラケズリ、外面粗いハケ調整を行う。23は土師器瓶。通常の瓶より胎土が精良で器壁も薄く、瓶ではないかもしれない。内面ナデ、外面ハケ調整を行う。24は黒色土器B類碗。器表が風化しておりヘラミガキの線が見えない。高台は小さく低い。口径12.8cm。

その他の遺物

#### 土製品（図版28、第72図）

1～5は樽型の管状土罐。長さは5cm前後、重さは40g前後を計る。指ナデ、指オサエ整形を行う。6～29は細長の管状土罐。長さは4～5cm、重さは完形で4～6g。指ナデ、指オサエで整形する。30は3号竪穴住居跡覆土から出土した模造鏡。円板の中央を指でつまんで鈕としたもので、雑な作りである。鈕の穿孔は行っていない。比較的精良な粘土を使用し、肌褐色を呈す。

#### 石製品（図版28、第73図）

1は結晶片岩製紡錘車で、復元径5cm。雑な作りで、研磨の際の後線が明瞭に残る。また孔は中央からややずれる。2～10は砥石で、3は泥岩、5・7は砂岩、他は結晶片岩製である。いずれも良く使い込まれている。

#### 鉄製品（図版28、第73図）

11は斧箭式鎌で、茎を欠損する。12は刀子の闊部、13は刀子の身部か。14・15は鉄釘。16は細形の楔であろう。17～19は棒状の不明鉄製品で、断面四角形。19は茎部か。20は何かの闊部のように見えるが類例を知らない。

探頭番号	種類	出土場所	長さ(cm)	径(cm)	孔径(mm)	重量(g)	登録番号	
72図1	管状土鏝	南側流路中	4.8	3.2	1.0	42.2	1901	
72図2	管状土鏝	攪乱8	4.4	3.9	1.1	60.7	1202	
72図3	管状土鏝	枕24付近	6.0	2.9	1.0	46.2	1203	
72図4	管状土鏝	表探	(5.0)	3.0	1.0	(35.9)	1204	
72図5	管状土鏝	包含層	5.1	3.2	1.2	(28.2)	1205	
72図6	管状土鏝		5.0	1.5	0.3	11.6	1207	
72図7	管状土鏝	井戸埋土	4.9	1.3	0.3	7.1	1208	
72図8	管状土鏝		5.3	1.2	0.3	6.5	1209	
72図9	管状土鏝	溝6	4.8	1.0	0.3	3.8	1210	
72図10	管状土鏝	田河川埋土	4.6	1.1	0.3	4.4	1211	
72図11	管状土鏝	溝6	4.5	1.2	0.3	4.8	1212	
72図12	管状土鏝	住2	(4.8)	1.4	0.4	(7.9)	1213	
72図13	管状土鏝	溝8	(5.1)	1.2	0.2	(5.3)	1214	
72図14	管状土鏝	水路	4.9	1.4	0.4	6.0	1215	
72図15	管状土鏝	住1	4.9	1.1	0.4	(3.7)	1216	
72図16	管状土鏝	表探	4.6	1.0	0.3	(4.0)	1217	
72図17	管状土鏝	攪乱7	4.2	1.2	0.4	3.9	1218	
72図18	管状土鏝	田河川埋土	4.1	1.2	0.3	6.1	1219	
72図19	管状土鏝	住2カマド付近	(4.3)	1.2	0.2	(4.3)	1220	
72図20	管状土鏝	包含層	4.0	1.1	0.3	4.3	1221	
72図21	管状土鏝	溝11	(3.9)	1.2	0.2	(4.2)	1222	
72図22	管状土鏝	田河川下層	(3.8)	1.1	0.2	(3.5)	1223	
72図23	管状土鏝	住1	(3.6)	1.1	0.6	(2.7)	1224	
72図24	管状土鏝	表探	3.8	1.0	0.3	3.0	1225	
72図25	管状土鏝	表探	(3.6)	0.9	0.3	(2.1)	1226	
72図26	管状土鏝	攪乱14	(3.6)	1.0	0.2	(3.5)	1227	
72図27	管状土鏝	土坑6	(3.4)	1.1	0.2	(4.0)	1228	
72図28	管状土鏝	土坑5	(3.3)	1.0	0.3	(2.6)	1229	
72図29	管状土鏝	表探	(3.1)	(1.4)	0.5	(4.1)	1230	
72図30	土製模造鏝	住3埋土	(4.1)	(3.6)		(13.4)	190	
探頭番号	種類	出土場所	長さ(cm)	径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	登録番号
73図1	紡錘車	I-1住2	(5.0)	(5.0)	0.8	17.5	結晶片岩	1272
73図2	砥石	Ⅲ-3表探	5.9	4.0	0.8	25.0	結晶片岩	1256
73図3	砥石	Ⅲ-3 P 28西側表探	4.5	4.2	3.0	33.7	泥岩	1254
73図4	砥石	Ⅲ-1磨1 N o 2	8.0	5.7	0.9	71.4	結晶片岩	1257
73図5	砥石	Ⅲ-3包含層	6.5	3.4	4.2	106.2	砂岩	1255
73図6	砥石	Ⅲ-4磨1	11.5	4.7	1.5	143.2	結晶片岩	1264
73図7	砥石	Ⅲ-4住10 埋土	6.9	7.4	6.7	242.4	砂岩	1259
73図8	砥石	Ⅲ-1磨1 N o 1	11.5	7.5	1.6	264.1	結晶片岩	1261
73図9	砥石	I-1 暗橙褐色砂上面	12.6	11.3	2.3	564.2	結晶片岩	1260
73図10	砥石	Ⅲ-3表探	21.5	9.0	2.1	708.4	結晶片岩	1262
探頭番号	種類	出土場所	長さ(cm)	径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	登録番号	
73図11	鉄鏝	Ⅲ-3	(7.6)	(3.1)	0.4	15.8	1283	
73図12	刀子?	包含層	(2.8)	2.7	0.4	7.4	1288	
73図13	刀子	Ⅲ-4攪乱14	(5.1)	2.6	0.5	22.0	1294	
73図14	鉄釘	IV-1黒褐色土層中	(2.2)	0.5	0.6	3.0	1290	
73図15	鉄釘	IV-2露12	(4.8)	0.8	0.8	11.5	1286	
73図16	鉄楔	Ⅲ-4攪乱14	4.5	1.0	0.5	7.1	1295	
73図17	不明鉄器	Ⅲ-3 P 118	(3.0)	0.5	0.4	1.7	1291	
73図18	鉄釘		(3.5)	0.7	0.6	4.3	1285	
73図19	鉄釘	Ⅲ-3	(2.8)	0.5	0.4	2.7	1284	
73図20	不明鉄器	Ⅲ-4攪乱14	(5.3)	(4.5)	0.6	29.3	1293	

土製品・石製品・鉄製品観察表

## IV おわりに

今回の調査では、弥生時代から古墳時代、古代、近代にいたるまでの遺構・遺物を検出することができた。以下では各時期毎に遺構・遺物を概観し、船越二ノ上遺跡のまとめとしたい。

まず、弥生時代前期後半に属する遺物として、Ⅰ区落ち込み、Ⅱ区遺構検出面からそれぞれ出土した、口縁端部に刻目を施した甕が挙げられる。この2点以外に当該期に属する土器は無く、また顕著な遺構も認められない。これに遡る前期前半やそれ以前の遺物は全く検出していないので、人々が他所から移住し、一帯を居住地や営農地に選定したのは弥生時代前期後半になってから、ということになるだろう。弥生時代中期後半の遺構にはⅢ区10号土坑がある。胴部に2条の三角突帯を貼付した壺や、長く水平に伸びる鋤先口縁の丹塗り高環等は当該期の典型例と言える。遺構として検出したのはこれが唯一だが、他にⅢ区自然流路やⅣ区黒褐色土層から鋤先口縁の壺が出土している。付近に当該期の遺構の存在するのであろう。続く弥生時代中期末の袋状口縁や甕形土器がⅢ区ピットから出土しているが、遺構は確認出来ていない。また弥生時代後期後半の壺頸部片や胴部片をⅠ区南東側のピットから出土しているが、これも遺構は確認していない。

古墳時代前期～中期前半の土器として、Ⅱ区出土土器が挙げられる。この中で、33号溝出土の小型器台は布留(古)段階、1号土坑出土の甕は布留(中)段階のものである。遺構では、長方形プランで2本主柱の1号竪穴住居跡が、出土した小型丸底壺から布留(新)段階に属す。

5世紀後半～6世紀初頭の時期の遺構にⅢ区の竪穴住居跡群がある。いずれも4本の主柱をもつ隅丸方形プランの竪穴住居跡で北壁中央にカマドを付設するものが多い。規模は4mに満たないものから6mを超えるものまであり、かなりばらつきがある。カマドに関しては遺存状態の良い2・8号竪穴住居跡を例にとれば、どちらも袖部長が80cmを超える比較的大型のもので堅牢に構築されており、形態的に古相である。また2号竪穴住居跡からはカマド付近からミニチュア土器5個体、覆土から土製模造鏡1個体が出土しており、住居内祭祀の顕著な一例と言えるだろう。

6世紀後半～7世紀前半の遺構にはⅠ区南東部の竪穴住居跡群が挙げられる。この中で、2号竪穴住居跡は先述した様に長方形プランの特異な形態である。また重複関係にある4・5号竪穴住居跡は、古い4号竪穴住居跡の方が4主柱で半突出カマド、5号竪穴住居跡の方が1主柱で全突出カマドで、住居形態・カマド形態の期的変化が重複関係で確認できた例である。検出した竪穴住居跡は計5棟に過ぎないが、地形等を考慮すると集落は両側に大きく展開するだろう。

Ⅰ区南東部以外に、Ⅲ区の溝や自然流路、ピットから6世紀後半～8世紀にかけての遺物が出土している。Ⅲ区で検出した1・2号独立柱建遺跡は遺物が出土せず詳細な時期は不明だが、古墳時代後期とみて良いだろう。

古代・中世の遺物はⅢ・Ⅳ区から出土している。中でもⅢ区2号土坑出土土器は10世紀初頭の一括資料として重要である。他に11世紀中頃～後半代の遺物を出土した6号土坑、10世紀初頭～中世後半の遺物が出土した8号溝などがある。Ⅳ区で検出した井戸は出土物にかなりの時期幅があるようだが、一応12世紀代のものと考えている。

近代の遺構として、Ⅳ区で検出した旧河川が挙げられる。出土遺物には陶磁器・ガラス製品等があり、昭和10年代後半埋没との話とも時期的に整合する。

以上で船越二ノ上遺跡の報告を終了する。浮羽地域では近年開発に伴う発掘調査の成果が急速に蓄積されつつあり、当遺跡を含めた地域研究の活性化が望まれる。

# 版 图



1 1区東端部全景  
(空中写真)



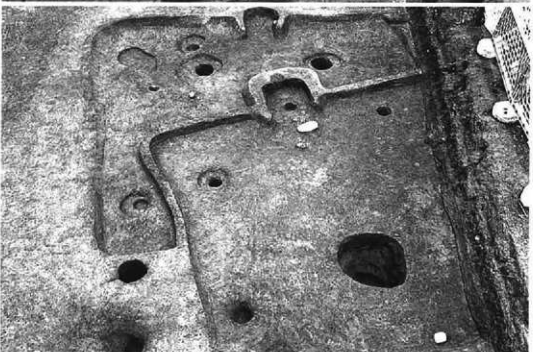
2 1区全景 (空中写真)



1 1区1・2号竪穴住居跡（南から）



2 1区3号竪穴住居跡（東から）



3 1区4・5号竪穴住居跡（南から）



1 1区4号竪穴住居跡  
カマド（南から）



2 1区5号竪穴住居跡  
カマド（南から）



3 1区1号土坑  
（南から）





1 1区2号土坑  
(南から)



2 1区1号溝東端断面  
(西から)



3 1区1号溝 (西から)



1 1区4・5号溝付近  
(南から)



2 1区5・8・9号溝付  
近(南から)



3 1区1・22・23号溝付  
近(西から)



1 I区1・26号溝付近  
(南から)



2 I区21～23号溝  
(北から)



3 I区21～23号溝  
(南から)

1 1区23号溝断面  
(北から)



2 1区落ち込みトレ  
ンチ (西から)



3 1区落ち込みトレ  
ンチ断面 (北から)





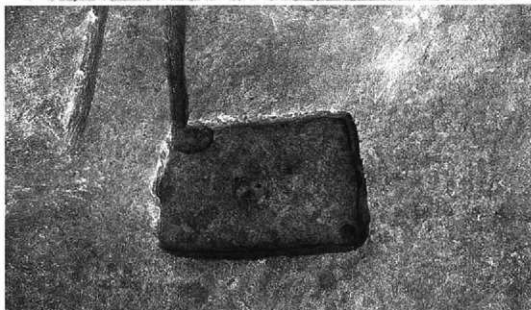
1 Ⅱ区上空から筑後川を望む(空中写真)



2 Ⅱ区全景(空中写真)



1 II区1号堅穴住居跡  
(南から)



2 II区2号堅穴住居跡  
(南から)



3 II区28~30号溝付近  
(北から)



1 Ⅲ区全景 (空中写真)



2 Ⅲ区中央付近 (空中写真)

1 Ⅲ区1号竪穴住居跡  
(南から)



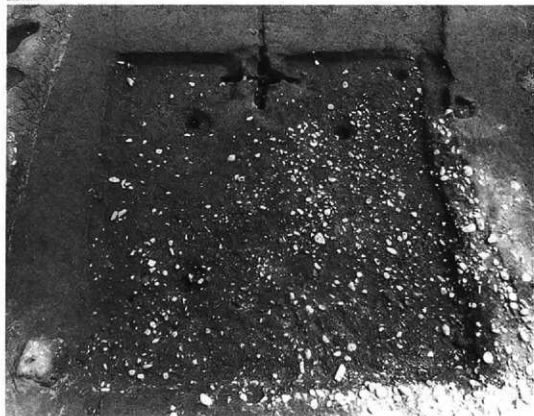
2 Ⅲ区1号竪穴住居跡  
土層断面 (北から)



3 Ⅲ区1号竪穴住居跡  
カマド (南から)





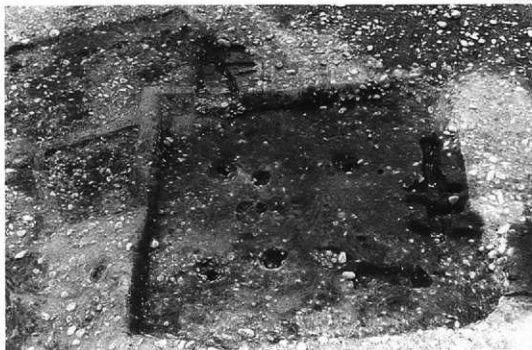


1 Ⅲ区2号竪穴住居跡  
(西から)



2 Ⅲ区2号竪穴住居跡  
カマド(西から)

1 Ⅲ区3・4号竪穴住居跡（北から）



2 Ⅲ区3号竪穴住居跡（南から）

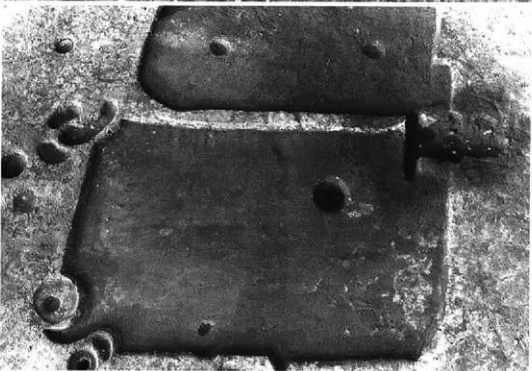


3 Ⅲ区3号竪穴住居跡  
カマド（南から）

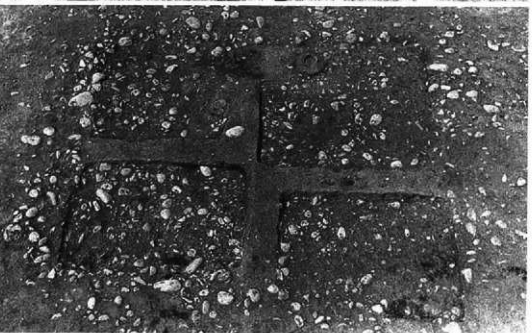




1 III区4号竪穴住居跡  
(東から)



2 III区6号竪穴住居跡  
(南から)



3 III区7号竪穴住居跡  
(南から)

1 Ⅲ区9号竪穴住居跡  
(南から)

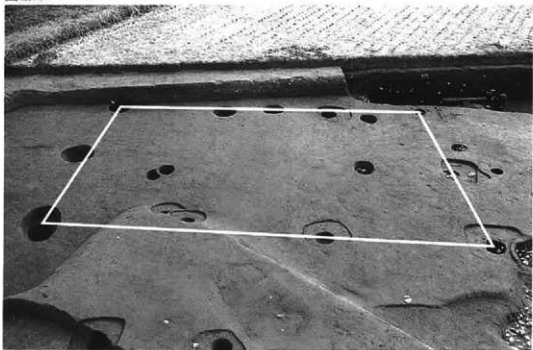


2 Ⅲ区10号竪穴住居跡  
(南から)

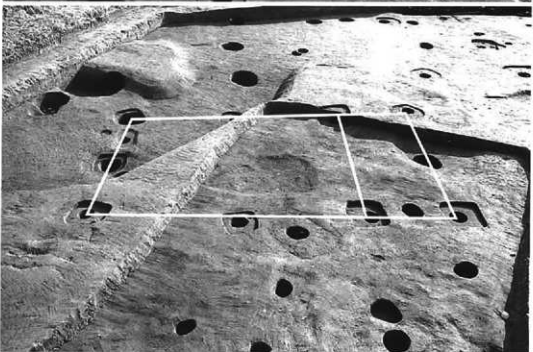


3 Ⅲ区10号竪穴住居跡  
カマド (南から)





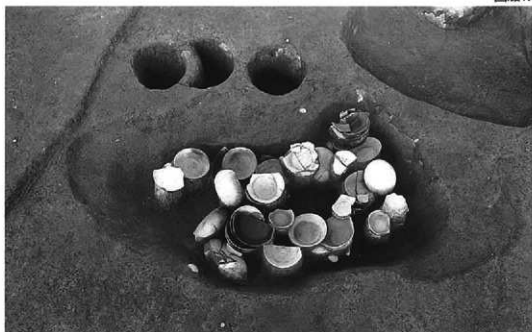
1 Ⅲ区1号掘立柱建物跡（北から）



2 Ⅲ区2号掘立柱建物跡（北から）



3 Ⅲ区1号土坑（北から）



1 III区2号土坑  
(南から)



2 III区6号土坑  
(北から)



3 III区10号土坑  
(南から)



1 IV区全景  
(空中写真)



2 IV区全景 (西から)



1 IV区井戸 (南から)



2 IV区井戸断面  
(南から)



3 IV区旧河川  
(北から)





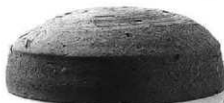
17-1



25-15



23-1



25-17



23-10



27-1



25-2



27-8



25-5



27-9



25-11



29-13



27-10



32-5



29-11



32-6



29-12



32-7



29-17



29-18



29-19



32-3



32-8



35-3



41-13



41-6



41-14



41-9



41-14



41-12



44-2



41-13



44-7



46-3



46-8



46-10



46-11



46-12



53-1



54-1



54-2



54-3



54-4



54-5



54-6



54-7



54-8



54-9



54-10



54-11



54-13



54-14



54-15



55-16



55-17



55-18



55-19



55-20



55-22



55-23



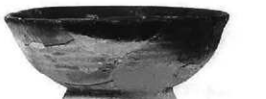
55-24



55-27



55-28



55-29



55-31



56-5



56-7



56-11



56-12



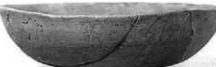
56-13



56-14



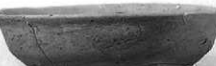
56-16



56-17



56-18



56-19



56-25



56-27



57-2



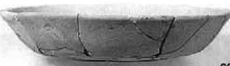
57-3



59-14



59-15



60-9



60-16



61-21



62-4



62-12



62-14



62-18



62-22



64-13



64-14



65-24



65-25



66-9



67-32



71-11



71-22



71-24



70-1



70-18



70-4



70-19



70-7



70-20



70-14



70-25



70-15



70-27



70-16



70-28

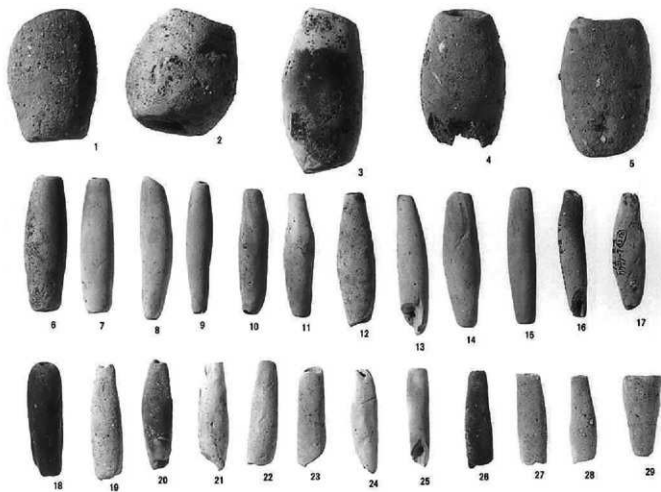


70-17



70-29





1 出土管状土锤



2 出土土製模造鏡・石製品・鉄製品

# 報告書抄録

ふりがな	ふなこしにのういせき							
書名	船越ニノ上遺跡							
副書名	福岡県浮羽郡田主丸町大字船越所在遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第11集							
編著者名	齋部麻矢・吉田東明・池村真之							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡市博多区東公園7-7							
発行年月日	西暦1999年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ° ′ ″	東 経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
船越ニノ上遺跡	福岡県浮羽郡 田主丸町大字船越 字ニノ上他	40829		33° 20′ 56″	130° 43′ 04″	1995.11.18 └ 1996.03.23 1996.04.28 └ 1996.11.14 1998.06.16 └ 1998.08.22	15,155㎡	道路建設 (一般国 道210号 浮羽バイ パス建設)
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
船越ニノ上遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 平安時代	土坑 竪穴住居跡・土坑・溝 ・掘立柱建物跡 土坑・溝	弥生土器・土師器・須恵器 ・陶磁器・石器・鉄器				

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 10	登録番号 15

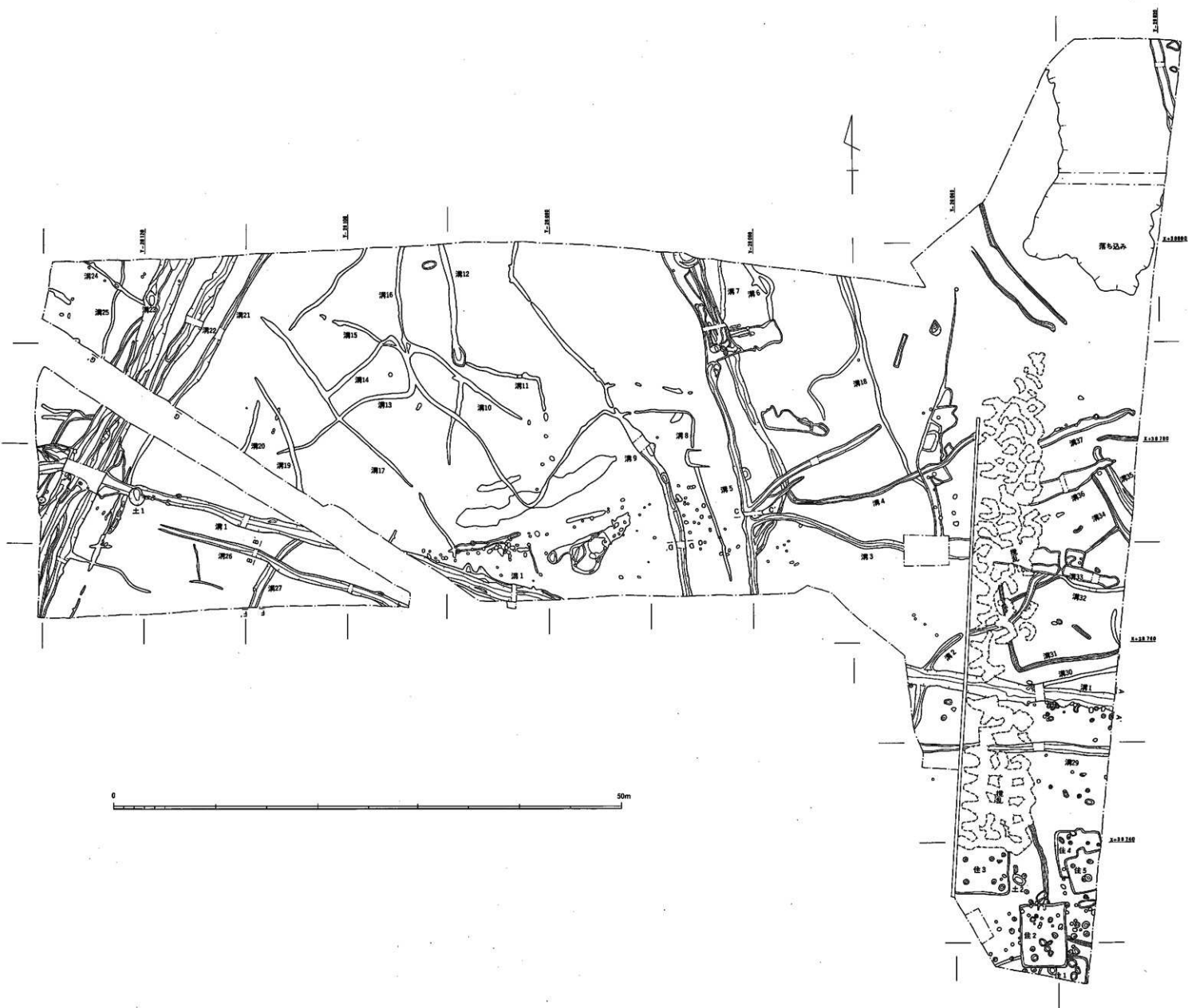
一般国道  
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第11集

船越ニノ上遺跡

平成11年3月31日

発行 福岡県教育委員会  
福岡市博多区東公園7番7号

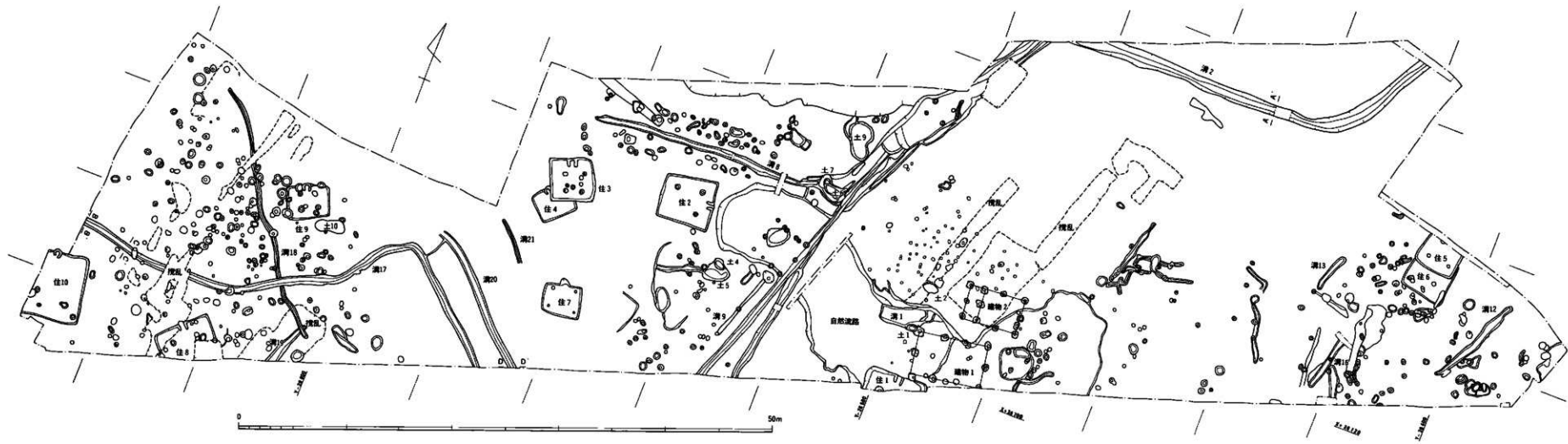
印刷 白木メディア株式会社  
福岡市博多区吉塚6丁目5番28号



付圖1 船越二ノ上遺跡I区遺構配置圖 (1/50)



付图2 船越二ノ上遺跡II区遺構配置図(1/50)



付図3 船越二ノ上遺跡Ⅲ区遺構配置図 (50m)